
埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第105集

深谷市内遺跡 XVI

2009.3

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第105集

ふか や し な い い せき
深 谷 市 内 遺 跡 XVI

2009.3

深谷市教育委員会

序

埼玉県北部に位置する深谷市は、北部は利根川水系の低地で、南部は秩父山地から流れ出た荒川が扇状台地を形成する平坦な地形となっています。

こうした豊かな自然環境のもと、古代人の暮らした足跡が埋蔵文化財として今なお多く眠っています。なかでも、縄文時代草創期の土器を出土した西谷遺跡をはじめとして、再葬墓で著名な上敷免遺跡、県内有数の大規模な鹿島古墳群、榛澤郡家正倉跡と想定される「中宿古代倉庫群跡」や国指定重要文化財「緑釉手付瓶」を検出した西浦北遺跡など、重要な遺跡が多数存在します。

深谷市では、こうした貴重な遺跡群を保護するために銳意努力してまいりましたが、やむなく破壊を免れ得ない場合には、記録保存のための発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成9年度に国庫補助事業として、個人住宅建築に先立ち実施した発掘調査の成果をまとめたものです。各地点とともに熊野遺跡内の調査でしたが、古代から近世に至る様々な遺構・遺物が検出され、地域史を解明する上で貴重な資料を得ることができました。

本書が学術・研究関係はもとより、文化財保護に対する啓蒙・普及を図る資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成まで、多大なるご理解とご協力を賜りました関係各位・諸機関に心より御礼申し上げます。

平成21年3月

深谷市教育委員会

教育長 猪野幸男

例　　言

1. 本書は、平成9年度国庫補助事業として実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。

2. 発掘調査の期間及び調査担当者は、下記の通りである。

熊野遺跡102次	平成9年4月22日～平成9年5月16日	宮本直樹
熊野遺跡107次	平成9年6月2日～平成9年6月27日	宮本直樹
熊野遺跡118次	平成9年11月4日～平成9年11月21日	宮本直樹
熊野遺跡122次	平成9年12月8日～平成9年12月20日	竹野谷俊夫
熊野遺跡124次	平成9年12月15日～平成9年12月26日	宮本直樹

3. 整理・報告書刊行事業は、平成20年度国庫補助事業として実施した。

4. 出土品の整理及び図版作成は、宮本直樹と竹野谷俊夫が行った。

5. 本書の執筆は、第Ⅲ章4項を竹野谷俊夫、それ以外を宮本直樹が担当した。

6. 本書に掲載した資料は、深谷市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 発掘調査位置図は岡部町都市計画図（1/2,500及び1/10,000）を、遺跡分布図は国土地理院発行『本庄』（1/25,000）を使用した。

2. 遺構実測図は、現場では基本的に1/20、カマド実測図を1/10とし、本書掲載の段階で1/60及び1/30とした。遺物については、基本的に1/3で掲載した。

3. 遺物観察表の数値に（ ）のあるものは推定値、《 》のあるものは残存値を示す。

目 次

序

例言・凡例

I	発掘調査に至るまでの経緯	1
1.	発掘調査の経緯	1
2.	発掘調査・整理・報告書刊行の組織	2
II	遺跡の地理・歴史的環境	6
1.	地理的環境	6
2.	歴史的環境	6
III	発見された遺構と遺物	9
(1)	熊野遺跡102次調査	9
(2)	熊野遺跡107次調査	13
(3)	熊野遺跡118次調査	18
(4)	熊野遺跡122次調査	25
(5)	熊野遺跡124次調査	37
IV	発掘調査のまとめ	52

挿図目次

第1図 熊野遺跡の範囲と調査地点	3	第30図 1号住居跡出土遺物実測図(1)	29
第2図 熊野遺跡102次調査地点位置図	3	第31図 1号住居跡出土遺物実測図(2)	30
第3図 熊野遺跡107次調査地点位置図	4	第32図 1号住居跡出土遺物実測図(3)	31
第4図 熊野遺跡118次調査地点位置図	4	第33図 2号住居跡実測図	32
第5図 熊野遺跡122次調査地点位置図	5	第34図 2号住居跡出土遺物実測図	32
第6図 熊野遺跡124次調査地点位置図	5	第35図 3号住居跡実測図	33
第7図 周辺の遺跡分布	8	第36図 3号住居跡出土遺物実測図	34
第8図 熊野遺跡102次調査全測図	10	第37図 4号住居跡実測図	34
第9図 1号掘立柱建物跡実測図	11	第38図 土坑出土・表採遺物実測図	35
第10図 1号・2号溝実測図	12	第39図 1～4号土坑実測図	36
第11図 1号・2号土坑実測図	13	第40図 熊野遺跡124次調査全測図	38
第12図 熊野遺跡107次調査全測図	14	第41図 1号住居跡実測図 及び遺物分布状況図	39
第13図 1号溝実測図	15	第42図 1号住居跡カマド実測図	39
第14図 1号溝出土遺物実測図	16	第43図 1号住居跡出土遺物実測図(1)	40
第15図 2・3号溝実測図	17	第44図 1号住居跡出土遺物実測図(2)	41
第16図 3号溝出土遺物実測図	18	第45図 2・3・4号住居跡実測図	43
第17図 熊野遺跡118次調査全測図	19	第46図 2号住居跡カマド実測図	43
第18図 1号井戸跡実測図	20	第47図 2号住居跡出土遺物実測図	44
第19図 1号井戸跡出土遺物実測図	20	第48図 3・4号住居跡出土遺物実測図	45
第20図 1・2号溝実測図	21	第49図 5号住居跡実測図	46
第21図 3号溝実測図	22	第50図 5号住居跡出土遺物実測図	46
第22図 1・3号溝出土遺物実測図	22	第51図 6号住居跡実測図	47
第23図 1号土坑実測図	23	第52図 1号溝実測図	47
第24図 2・3号土坑実測図	23	第53図 1号溝出土遺物実測図(1)	48
第25図 4号土坑実測図	23	第54図 1号溝出土遺物実測図(2)	49
第26図 1・4号土坑出土遺物実測図	24	第55図 1号溝出土遺物実測図(3)	50
第27図 熊野遺跡122次調査全測図	26	第56図 1号溝出土遺物実測図(4)	51
第28図 1号住居跡実測図	27	第57図 熊野遺跡全体遺構配置図	53
第29図 1号住居跡カマド実測図	28	第58図 熊野遺跡(区画整理地内)遺構配置図	55

図版目次

写真図版 1 熊野遺跡102次・107次検出遺構	5 熊野遺跡107次・118次・122次(1)
2 熊野遺跡118次・122次(1)検出遺構	出土遺物
3 熊野遺跡122次検出遺構(2)	6 熊野遺跡122次(2)、124次(1)出土遺物
4 熊野遺跡122次(3)・124次検出遺構	7 熊野遺跡124次出土遺物(2)
	8 熊野遺跡124次出土遺物(3)

I 発掘調査に至るまでの経緯

1 発掘調査の経緯

埼玉県北部に位置する深谷市は、埋蔵文化財の宝庫として古くから知られてきた。なかでも、縄文時代草創期の土器を出土した西谷遺跡を筆頭に、弥生土器を出土した上敷免遺跡、鹿島古墳群・黒田古墳群、郡衙正倉跡と想定される中宿遺跡、など、各時代を通して著名な遺跡が多い。さらに畠山重忠をはじめ多くの武蔵武士たちが活躍した地域でもある。

本報告の5件の発掘調査は、平成9年度国庫補助事業として実施したものである。いずれも個人住宅建築に先立ち、熊野遺跡内において発掘調査を実施した。各調査ともに事業主や土地所有者の協力の下、必要最小限の措置を講じたものである。

以下、発掘調査に至るまでの経緯を記す。

熊野遺跡（県登録番号No63-017）は、JR岡部駅のすぐ北西に立地し、県道蛭川普济寺線と国道17号線に挟まれた範囲である。東西約1,300m、南北約1,000mを測る、市内でも大規模な遺跡である。かつては、駅から少し離れると畑地の多く残っていたが、平成元年に『岡中央土地区画整理事業』が立ち上がり、景観が大きく様変わりした。

この区画整理事業に先立つ発掘調査は、平成4年度から実施され、道路建設や個人住宅の移転などに伴う調査件数が急増した。熊野遺跡における発掘調査は、現在までに163次に及ぶ。また、この区画整理事業地内に埼玉県住宅供給公社が岡中央団地を建設するにあたり、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埼埋文」と記す）も4次にわたる調査を実施している。

(1) 第102次調査

個人住宅建築に伴う建築確認申請に先立ち、平成9年3月13日付けで、埋蔵文化財の所在についての照会文書が、宮本茂氏（以下、事業主と記す）～岡部町教育委員会（当時、以下「町教委」と記す）あてに提出された。これを受けて町教委は、埋蔵文化財包蔵地図により開発予定地が熊野遺跡内であることを書面で回

答した。また、これと併せて、東に接する第20次調査・南に接する第35次調査により遺構の存在が想定されたため、発掘調査を実施することで調整を進めた結果、開発に先立ち事業主から文化財保護法57条の2に基づく埋蔵文化財発掘届が、文化庁長官宛に提出された。これを受けて、町教委では、文化財保護法98条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を同年4月21日に提出した。

(2) 第107次調査

個人住宅建築に伴う建築確認申請に先立ち、平成9年4月20日付けで埋蔵文化財の所在についての照会文書が、小林金八氏から町教委宛てに提出された。これを受けて町教委は、埋蔵文化財包蔵地図により開発予定地が熊野遺跡内であることを書面で回答するとともに、遺跡の詳細な把握をするための試掘調査が必要である旨を伝えた。

その後事業主より試掘調査依頼書が提出されたため、町教委では事業主や重機等の日程調整を行い、試掘調査を実施したところ、遺構の存在が明らかとなった。

このため、発掘調査を実施することで調整を進めた結果、開発に先立つ平成9年5月2日に事業主から文化財保護法57条の2に基づく埋蔵文化財発掘届が、文化庁長官宛に提出された。これを受けて、町教委では、文化財保護法98条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を同年5月28日に提出した。

(3) 第118次調査

個人住宅建築に伴う建築確認申請に先立ち、平成9年10月12日付けで埋蔵文化財の所在についての照会文書が、須藤道子氏から町教委宛てに提出された。これを受けて町教委は、埋蔵文化財包蔵地図により開発予定地が熊野遺跡内であることを書面で回答した。また、これと併せて近接する埼埋文調査B地点の調査結果により、遺構の存在が想定されたため、発掘調査を実施することで調整を進めた結果、開発に先立ち事業主から文化財保護法57条の2に基づく埋蔵文化財発掘届が、平成9年10月28日付けで文化庁長官宛に提出さ

れた。これを受け、町教委では、文化財保護法98条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を同年10月30日に提出した。

(4) 第122次調査

個人住宅建築に伴う建築確認申請に先立ち、平成9年5月26日付けで埋蔵文化財の所在についての照会文書が、吉田哲哉氏から町教委宛てに提出された。これを受けて町教委は、埋蔵文化財包蔵地図により開発予定地が熊野遺跡内であることを6月9日に書面で回答するとともに、遺構の詳細な把握をするための試掘調査が必要である旨を伝えた。

その後10月14日に事業主より試掘調査依頼書が提出されたため、町教委では事業主や重機等の日程調整を行い、試掘調査を実施したところ、遺構の存在が明らかとなつた。

回答した。また、これと併せて近接する埼埋文調査B地点の調査結果により、遺構の存在が想定されたため、発掘調査を実施することで調整を進めた結果、開発に先立ち事業主から文化財保護法57条の2に基づく埋蔵文化財発掘届が、平成9年12月1日付けで文化庁長官宛に提出された。これを受け、町教委では、文化財保護法98条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を同年12月4日に提出した。

(5) 第124次調査

個人住宅建築に伴う建築確認申請に先立ち、平成9年12月3日付で、埋蔵文化財の所在についての照会文書が、岡潔氏から町教委宛てに提出された。これを受けて町教委は、埋蔵文化財包蔵地図により開発予定地が熊野遺跡内であることを12月4日に書面で回答した。また、近接する第98次調査の成果により、遺構の存在が想定されたため、発掘調査を実施することで調整を進めた結果、開発に先立ち事業主から文化財保護法57条の2に基づく埋蔵文化財発掘届が、文化庁長官宛に提出された。これを受け、町教委では、文化財保護法98条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を12月11日に提出した。

2. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

(1) 発掘調査（平成9年度：岡部町）

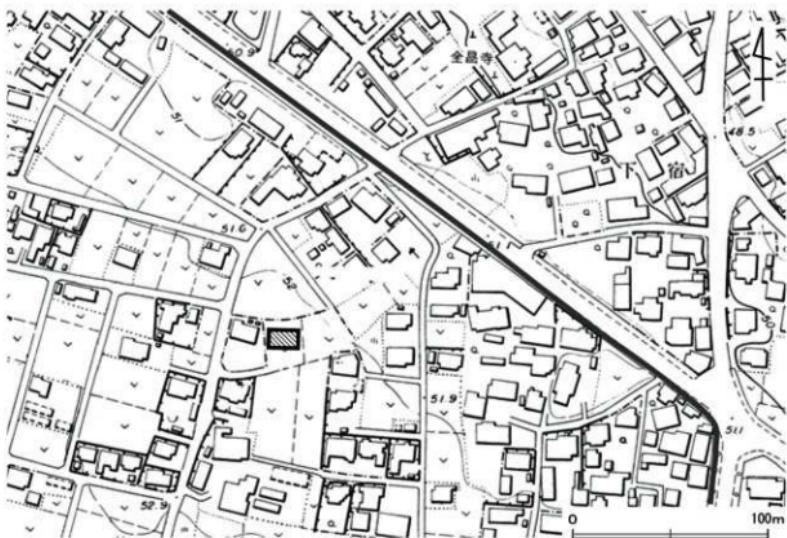
教 育 長	大野 福治
文化財保護室長	今井 宏
室 次 長	米沢 信男
係 長	大谷 住雄
主 任	中野 弘
"	鳥羽 政之
主 事	平田 重之
"	宮本 直樹
臨 時 職 員	竹野谷俊夫
"	松田 哲
"	大谷 規雄
"	角田ミヤ子
"	坂野 深子
"	小館かおる
"	佐藤 由江
"	布施みゆき
"	山崎えり子
"	伊藤万里子

(2) 整理・報告書刊行（平成20年度）

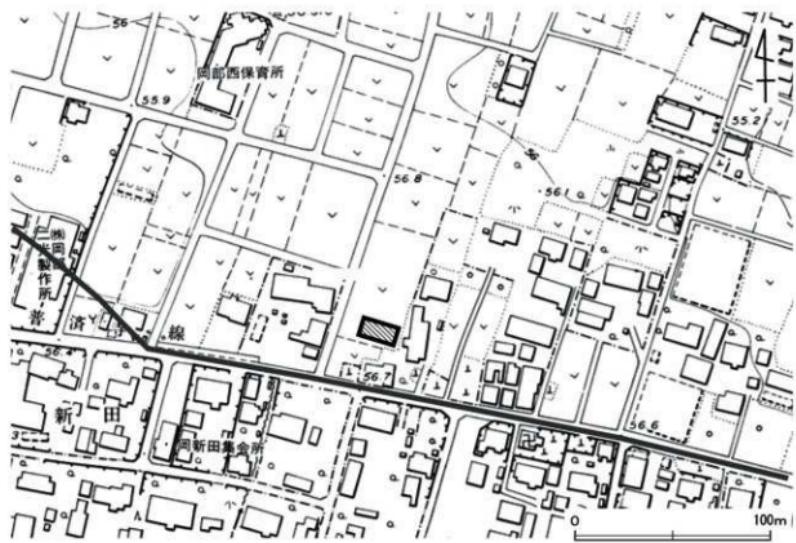
教 育 長	猪野 幸男
部 長	石田 文雄
教 育 次 長	中村 信雄
課 長	澤出 晃越
課 長 補 佐	吉羽 厚仁
主 査	鳥羽 政之
"	森下昌市郎
"	宮本 直樹
主 任	知久 裕昭
主 事	幾島 審
臨 時 職 員	栗原貴世実
"	竹野谷俊夫
"	伊藤万里子
"	黒澤 恵
"	佐藤 由江
"	布施みゆき



第1図 熊野遺跡の範囲と調査地点



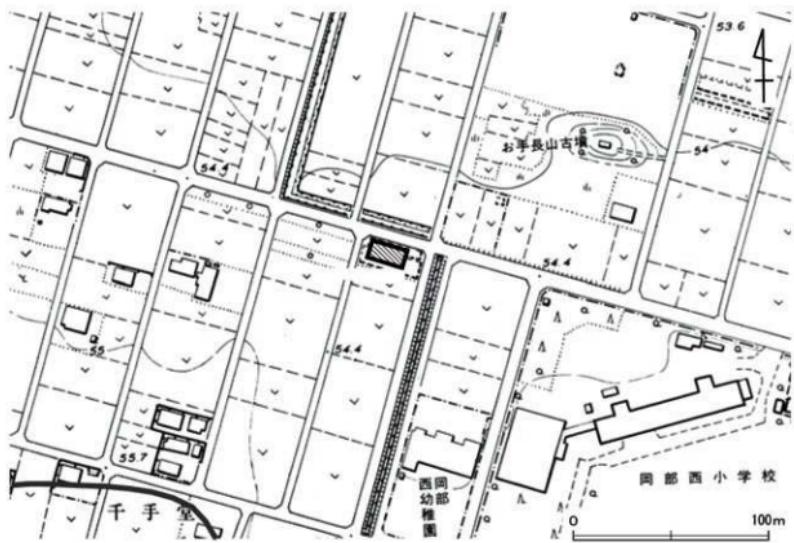
第2図 熊野遺跡102次調査地点位置図



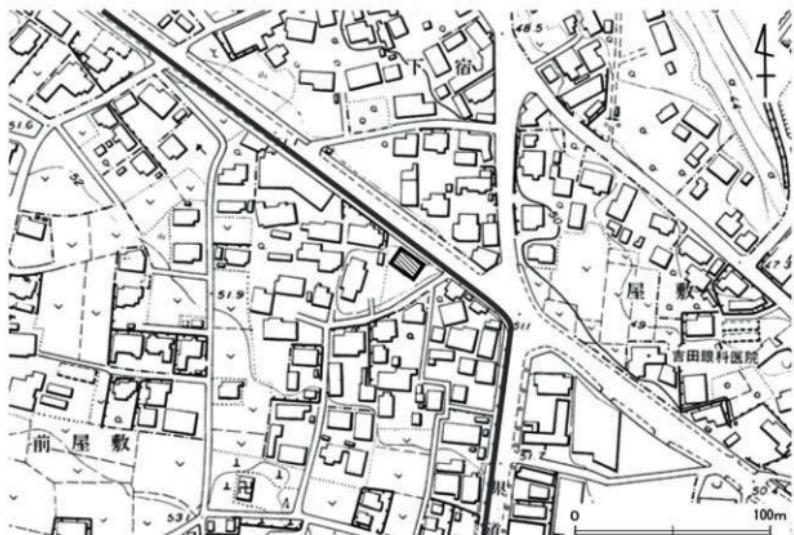
第3図 熊野遺跡107次調査地点位置図



第4図 熊野遺跡118次調査地点位置図



第5図 熊野遺跡122次調査地点位置図



第6図 熊野遺跡124次調査地点位置図

II 遺跡の地理・歴史的環境

1. 地理的環境

埼玉県の北部に位置する深谷市は、北は利根川を挟んで群馬県と接する。南部には荒川が東流し、両河川が最も近接する地域である。

深谷市の南半部は櫛引台地、北半部は妻沼低地であり、地形的に二分できる。櫛引台地は、荒川によって形成された荒川扇状地が浸食されてできた洪積台地である。寄居付近を頂点として、西側の櫛引面と東側の一段低い寄居面、両者に挟まるように御陵成ヶ原面からなる。この間を唐沢川や藤治川が北流する。また、台地上には、観音山（標高77m）、仙元山（標高98m）、山崎山（標高117m）などの独立丘陵が存在する。台地の北端は崖線を形成し、比高差5~10mで妻沼低地と接する。

妻沼低地は、利根川の作用で形成された沖積低地である。さらに、利根川をはじめ小山川・福川などによって、自然堤防や後背湿地が形成されたと推定されている。

熊野遺跡は、櫛引台地北部の深谷市岡字熊野他に所在する。JR高崎線岡部駅の北西に位置し、東西1300m、南北1.000mの範囲に及ぶ大規模な遺跡である。かつては、駅から少し離れると住宅も少なく、畠地が広がっていたが、近年は区画整理事業等により、市街化が急激に進んでいる。

2. 歴史的環境

熊野遺跡の立地する櫛引台地北部は、早くから開発が進み、これらに伴う発掘調査が多く実施してきた。調査の結果、縄文時代～中世に至る様々な遺構・遺物が検出されている。

縄文時代では、西谷遺跡から爪形文系・多縄文系土器などが検出され、草創期の土器として研究上重要なものである。早期では、撚糸文系土器が西谷遺跡、沈線文系土器が中原・西谷遺跡、条痕文形土器が西龍ケ谷・西谷・茶臼山遺跡から発見されている。前期では宮西遺跡で関山式期、四十坂遺跡で黒浜式期、沖田・

東光寺裏遺跡で諸磯B式期の集落跡が検出されている。中期では、水窪遺跡で勝坂式期～加曾利E1式期、菅原遺跡で加曾利E3式期の環状集落が発掘調査されている。後期では、上宿遺跡で敷石住居跡が検出されている。晩期では、原ヶ谷遺跡の発掘調査で、安行IIIa式期の良好な資料が出土している。

弥生時代では、四十坂遺跡より縄文晚期～弥生初期の土器群が出土し、弥生初期のまとまった資料として早くから注目されてきた。平成2年の発掘調査では、再葬墓や土坑墓群が検出され、弥生時代の開始を窺わせる資料として重要である。

古墳時代にいたると、遺跡数は急増し、重要な遺構も多数確認されている。

四十坂遺跡からは、五領～和泉期にいたる方形周溝墓群が検出され、この段階から後期群集墳まで連続と墳墓が営まれていたことが知られる。中でも四十塚古墳は、横矧板鉢留短甲・五鈴鏡板付轡などを出土し、これらの遺物から5世紀後半の当地域の首長墓と捉えられている。

その後、6世紀代には、やはり首長墓と想定される寅稻荷塚古墳（前方後円墳）が四十塚古墳群内に出現する。これ以降、首長墓は、お手長山古墳（帆立貝式古墳）・内出八幡塚古墳（円墳）・愛宕山古墳（方墳）と順次南東方向へ移動しながら単独で築造されたことが認められる。

原ヶ谷戸遺跡は、方形周溝墓6基、円形周溝墓1基、円墳21基、帆立貝式古墳1基が検出されている。四十坂遺跡と藤治川の両岸に立地し、両古墳群の変遷過程のあり方が共通することが注目される。

熊野遺跡の東に接する白山古墳群では、6世紀代の古墳24基（円墳23、帆立貝式古墳1）が調査された。弾琴埴輪や壺を持った巫女の埴輪など6体の人物埴輪が、ほぼ完全な形で出土した。

この他に、菅原古墳群・前原古墳群・上原古墳群などが台地上に展開する古墳群であり、西山古墳群・千光寺古墳群・諏訪山古墳群などが丘陵上に立地する古墳群である。

なお、櫛引台地北部における古墳時代の集落は、現

在のところ中宿遺跡や上宿遺跡など数軒が確認されているに過ぎない。この時代の集落は、妻沼低地に立地する砂田前遺跡・岡部条里遺跡や本庄台地上の六反田遺跡・大奇遺跡・宮西遺跡などがあり、櫛引台地以外に分布の中心が認められる。

また、該期の遺跡として、猪山祭祀遺跡が挙げられる。畠の開墾中に偶然土製模造品が出土し、3回の開墾で形が判明したものだけでも100点を超える模造品を中心に数点の土師器が含まれる。遺跡が古代榛沢郡と児玉郡・那珂郡の郡界に存在する山崎山丘陵の斜面に位置することから、坂の神を祭った遺跡であったことが推定されている。

奈良～平安時代になると、様相は一変する。それまで墓域として利用されてきた熊野遺跡内に、突如集落が営まれる。これまでに163次に及ぶ調査が実施され、720軒を超える堅穴住居跡、160棟の掘立柱建物跡をはじめ、道路状遺構・大溝・石組井戸・連房式鍛冶工房など特殊な遺構が多数検出された。また、和銅開寶・円面鏡・帶金具・唐三彩の陶枕・刻字筋錘車・陶製仏殿・置きカマドなど他の集落では見られない貴重な遺物も多数出土している。

なお、集落の開始時期は、131次調査の1・2号堅穴住居跡から出土した畿内土産土器の年代観から、7世紀第3四半期と考えられている。さらに、1次調査において検出された7間×3間をはじめとする大型建物の存在から、該期の熊野遺跡は初期評家と想定されている。

また、櫛引台地縁辺部に位置する中宿遺跡からは、5次にわたる調査の結果、大規模な総柱式建物跡20棟が規則的に配置された状態で検出された。榛沢郡衙に伴う正倉跡と推定され、7世紀後半の成立であることから熊野遺跡との関連が想定される。また、中宿遺跡が立地する台地直下から、「滝下大溝」が検出された。その北方で条里遺構が確認されたことから、灌漑と運

河の機能を併せ持っていた大溝であったことが想定される。

さらに、熊野遺跡の北東に位置する岡遺跡は、8世紀第2四半期と考えられる蓮華文軒丸瓦などが古くから多量に表現され、庵寺跡と推測してきた。平成13年度に町教委が実施した確認調査により、版築された基礎状遺構が検出された。近接する住居跡からは、「権」の刻字瓦や「寺」と墨書きされた土師器坏なども出土し、寺院跡である可能性がほぼ確実となった。

なお、この岡庵寺の北側、中宿遺跡の東側にもあたる台地末端上に、島護産泰神社が鎮座する。北側は崖線であり、現在でも湧水が認められる。創建時期は不明であるが、これらの状況から、古代に遡る可能性を指摘しておきたい。

このように、奈良～平安時代の櫛引台地北部は、中宿遺跡・熊野遺跡を中心として、その周辺に集落や寺院が展開していた状況が窺われる。

古代から中世にかけては、猪股党の岡部六弥太忠済や丹党の榛沢六郎成清の活躍が『平家物語』などから知られる。

14世紀中ごろ、北関東の新田氏の勢力を抑え、さらに関東から越後に至る通路確保のために関東管領上杉憲顯の命により六男憲英が広鼻和城を築いたのが、深谷上杉氏の始まりであるといわれる。深谷城は、古河公方の勢力に備えるために、深谷上杉氏が康正2年(1156)に築城した説が有力であるという。当年9月17日には利根川沿いの岡部原(現在の深谷市岡部周辺)で古河軍と上杉軍が衝突している。この他に、岡部六弥太館跡からは、方形に廻る堀跡や井戸、土塁墓などが検出された。同様な堀跡は、熊野遺跡と白山遺跡からも検出され、館跡に付属するものと推定されている。西龍ヶ谷遺跡では、軸を描えて並んだ6棟の掘立柱建物群が確認された。



- | | | | |
|-------------|-----------------------|--------------|---------------|
| 1. 熊野遺跡 | (律令期集落・官衙・中世居館) | 18. 東光寺裏遺跡 | (绳文・平安集落) |
| 2. 中宿遺跡 | (郡衙正倉・律令期集落) | 19. 横沢六郎成清館跡 | (中世) |
| 3. 滝下遺跡 | (河川跡・律令期集落) | 20. 石蔵遺跡 | (古墳～平安集落・周溝墓) |
| 4. 岡廃寺 | (寺院跡・古墳～律令期集落) | 21. 地神祇遺跡 | (古墳～平安集落) |
| 5. 間部条里遺跡 | (古墳集落・条里水田・律令期居宅) | 22. 千光寺遺跡 | (古墳群・平安集落) |
| 6. 砂田前・種蒼遺跡 | (古墳～平安集落) | 23. 西谷遺跡 | (绳文) |
| 7. 白山遺跡 | (古墳群・律令期集落・中世居館) | 24. 茶臼山遺跡 | (古墳群) |
| 8. 新田遺跡 | (律令期集落) | 25. 伝上杉館跡 | (中世) |
| 9. 上宿遺跡 | (绳文・古墳～律令期集落) | 26. 山河聖天社 | (中世) |
| 10. 四十坂遺跡 | (绳文集落・弥生・古墳群・周溝墓・古墳群) | 27. 西籠ヶ谷遺跡 | (律令期集落・中世居館) |
| 11. 原ヶ谷戸遺跡 | (绳文・古墳集落・古墳群) | 28. 伝間部六郎太館跡 | (中世) |
| 12. 水窪遺跡 | (绳文・古墳集落・周溝墓・古墳群) | A. 四十坂浅間山古墳 | (円墳) |
| 13. 新井遺跡 | (律令期集落) | B. 宮福荷塚古墳 | (前方後円墳) |
| 14. 東五十子遺跡 | (古墳・中世集落) | C. お手長山古墳 | (帆立貝式古墳) |
| 15. 六反田遺跡 | (古墳・中世集落) | D. 前原愛宕山古墳 | (方墳) |
| 16. 大寺遺跡 | (绳文・弥生～律令期集落) | E. 内出八幡塚古墳 | (円墳) |
| 17. 西浦北遺跡 | (绳文・古墳～律令期集落) | F. 四十塚古墳群 | (古墳群) |

第7図 周辺の遺跡分布

III 発見された遺構と遺物

(1) 熊野遺跡第102次調査

① 発掘調査の経過

熊野遺跡第102次調査地点は、深谷市岡字前屋敷3047番地5（岡中央土地区画整理事業地内9街区II画地）である。

周囲は、区画整理事業及び個人住宅建築等により発掘調査が実施されてきた。近接して20次・35次・127次・131次調査区などが位置する。調査区中央での標高は、52.1mを測る。

発掘調査は、平成9年4月22日から同年5月16日にかけて実施した。発掘調査面積は、約397m²である。

発掘調査は、まずバックホーによる表土除去から行った。遺構確認面は、表土から30cmほど掘り下げたソフトローム面とした。

表土除去後、遺構確認作業を行い、掘立柱建物跡1軒、大溝1条、溝1条、土坑2基などを確認した。

遺構確認状況の写真撮影の後、大溝にトレーニチを3本設定し、ここから掘り下げを開始した。その後、順次他の遺構も掘り下げていった。

土層断面図の作成は、遺構掘り下げと並行して実施し、その後に平面図を作成した。土層断面図・平面図ともに1/20の縮尺で実測した。

全ての掘り下げ・図化作業が終了した後、全景写真を撮影した。これにより、発掘調査の全工程が終了し、機材等の撤収を行った。

② 遺構と遺物

調査により検出された遺構は、奈良時代の掘立柱建物跡1軒、平安時代の大溝1条、中～近世の土坑2基・溝1条である。

【1号掘立柱建物跡】

調査区の北西に位置する。1号大溝と重複し、切り合ひ関係から、1号溝の方が新しいことが確認されている。

今回検出されたのは東コーナーの一部であるが、西隣の第127次調査で本遺構の延長部が確認されており、

3間×3間の側柱建物であることが判明している。（第58図参照）このうち確認できたのは、1間×1間の範囲で、柱間は東西2.1m、南北2.8mを測る。主軸方位は、N-29°-Wである。

各柱穴の平面形態は隅丸長方形を主体とする。1号柱穴は、長軸115cm、短軸98cm、確認面からの深さ89cmを測る。2号柱穴は、長軸153cm、短軸120cm、確認面からの深さ90cmを測る。4号柱穴は調査区隅に位置するため規模は不明であるが、確認面からの深さは61cmである。いずれも底面から柱の「当り痕」が確認できた。

遺物は、土師器と須恵器の小破片が出土したが、図示し得るものはなかった。

【1号大溝】

調査区の北端に位置する。

北半部が調査区域外にあるため、確認できたのは東西4.65m、南北4.86mの範囲である。ただし、東方にて実施した81次・90次調査等により200m以上にわたり直線的に延びることが判明している。

今回は個人住宅建設に先立つ調査であることから、トレーニチ3本を設定して堀下げを実施した。検出できたのは溝の落ち際から深さ105cmまでの範囲であった。壁が緩やかに落ちていること、埋土上層に浅間B軽石が堆積していたことが確認できた。

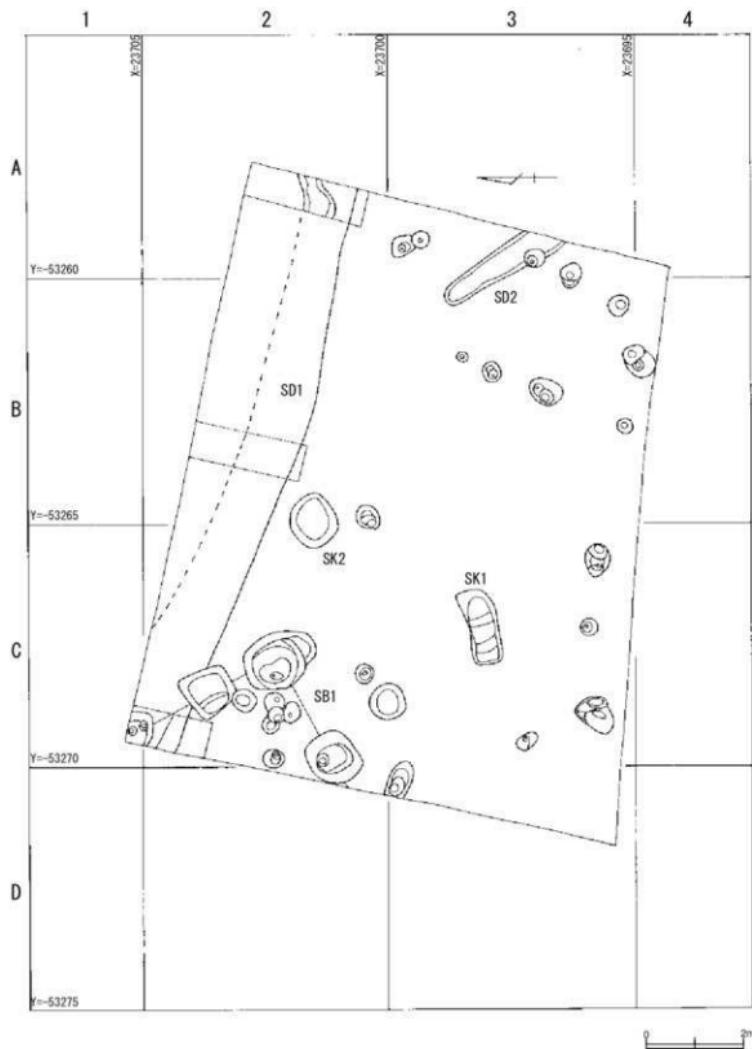
遺物は、図示し得るものは出土しなかった。

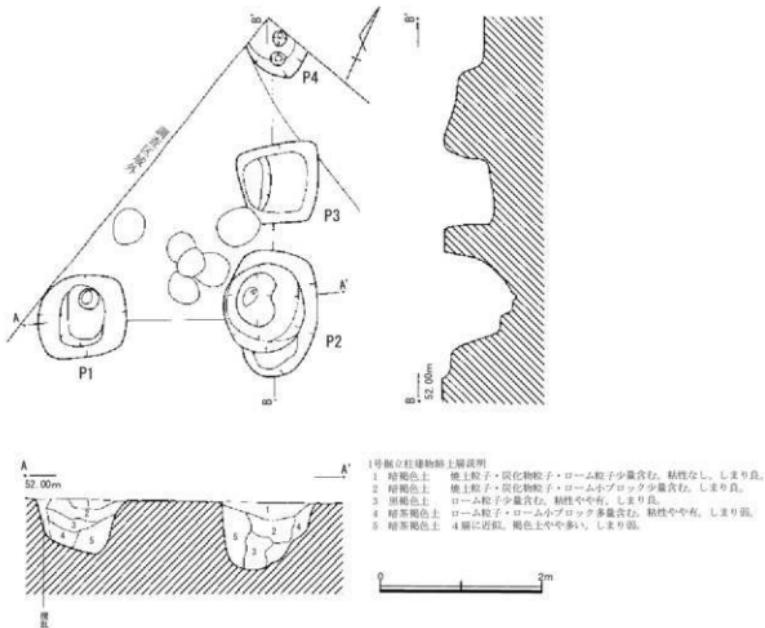
【2号溝】

調査区の東端に位置する。東部が調査区域外にあるため、全容は不明である。

確認できたのは、長さ2.5mの範囲である。幅は最大で63cmを測り、深さは44cmである。底面は平坦であり、断面形態は皿状を示す。主軸方位は、N-33°-Wを示す。

遺物は、土師器・須恵器の小破片が出土したが、図示し得るものはなかった。





第9図 1号掘立柱建物跡実測図

【1号土坑】

調査区の西部に位置する。

平面形態は長方形を呈し、長軸162cm、短軸63cmを測る。主軸方位は、N-70°-Eを示す。

壁はほぼ垂直に掘り込まれる。底面は、西部から東へ向かい2か所の段差をもつ。平坦である。最深部で、確認面から68cmを測る。

遺物は、土師器・須恵器の小破片が出土したが、図示し得るものはなかった。

【2号土坑】

調査区の北部に位置する。

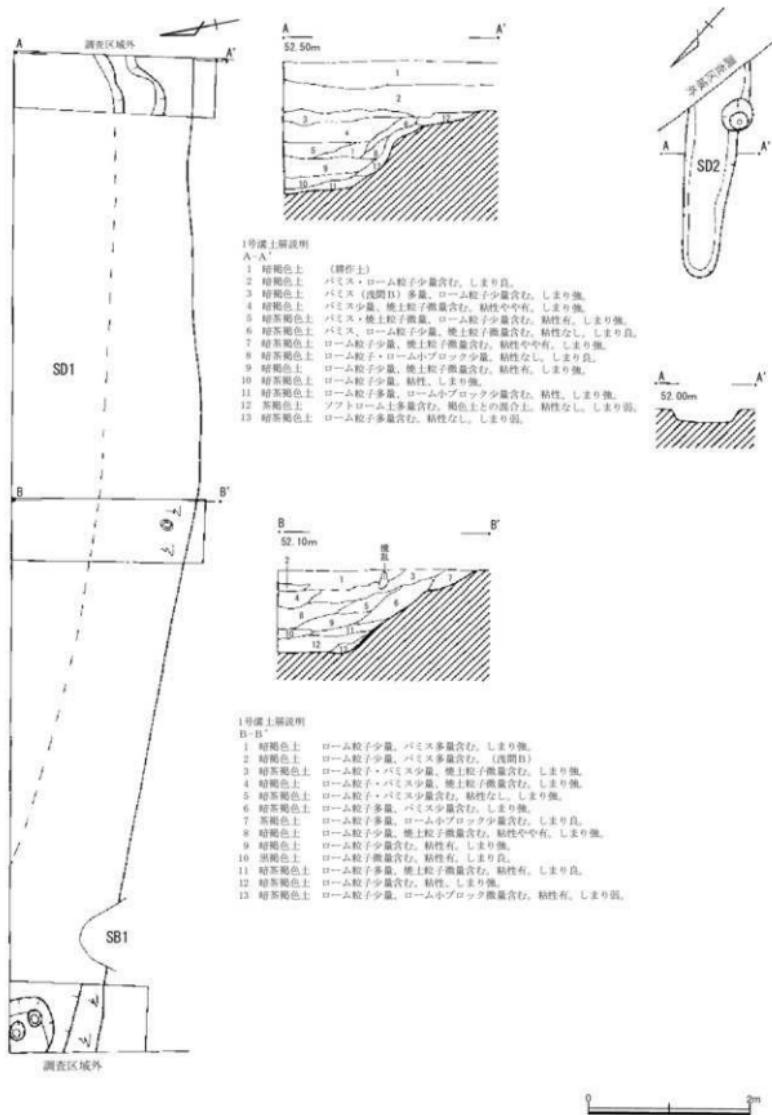
平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸103cm、短軸94cmを測る。主軸方位は、N-52°-Eを示す。

壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。確認面からの深さは、34cmを測る。

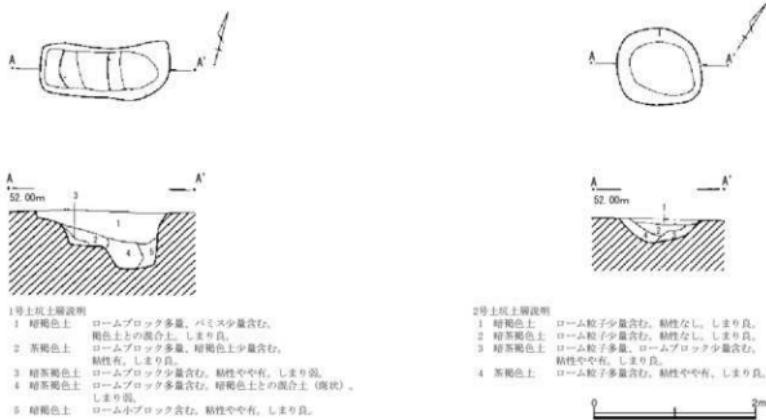
遺物は、土師器・須恵器の小破片が出土したが、図示し得るものはなかった。

③まとめ

1号掘立柱建物跡は、近接する調査結果と合わせ、3間×3間の掘立柱建物跡であることが判明した。また、1号大溝は131次調査で検出した延長部であり、10世紀代には廃絶されたものと考えられる。



第10図 1号・2号溝実測図



第11図 1号・2号土坑実測図

(2) 熊野遺跡第107次調査

① 発掘調査の経過

熊野遺跡第107次調査地点は、深谷市岡字熊野2939番地2（岡中央区画整理事業地内32街区4画地）である。標高は、調査区中央で約55.8mを測る。

発掘調査は、平成9年6月2日～同年6月27日にかけて実施された。発掘調査面積は、約500m²である。

発掘調査は、まずバックホーによる表土除去から始めた。遺構確認面は、表土から約60cm掘り下げたソフトローム面とした。表土除去後、遺構確認作業を行った。

遺構確認状況の写真撮影の後、遺構の掘り下げを開始した。掘り下げは、調査区西端から1号溝と2号溝を同時に始め、順次東へ掘り進めていった。

② 遺構と遺物

【1号溝】

調査区の中央を東西に走行する。両端が調査区域外にあるため、全容は不明である。確認できたのは、東西15.6mの範囲である。主軸方位は、N-64°-Wを示す。

今回は個人住宅建設に先立つ調査であるため、溝の

両端と中央の計3本のトレンチを設定し、調査を実施した。

壁は角度をもって掘り込まれ、底面は平坦である。確認面からの深さは、52cmを測る。幅は、195～372cmである。

須恵器の壺・高台壇・甕、土師器台付甕、土鍤などがあった。

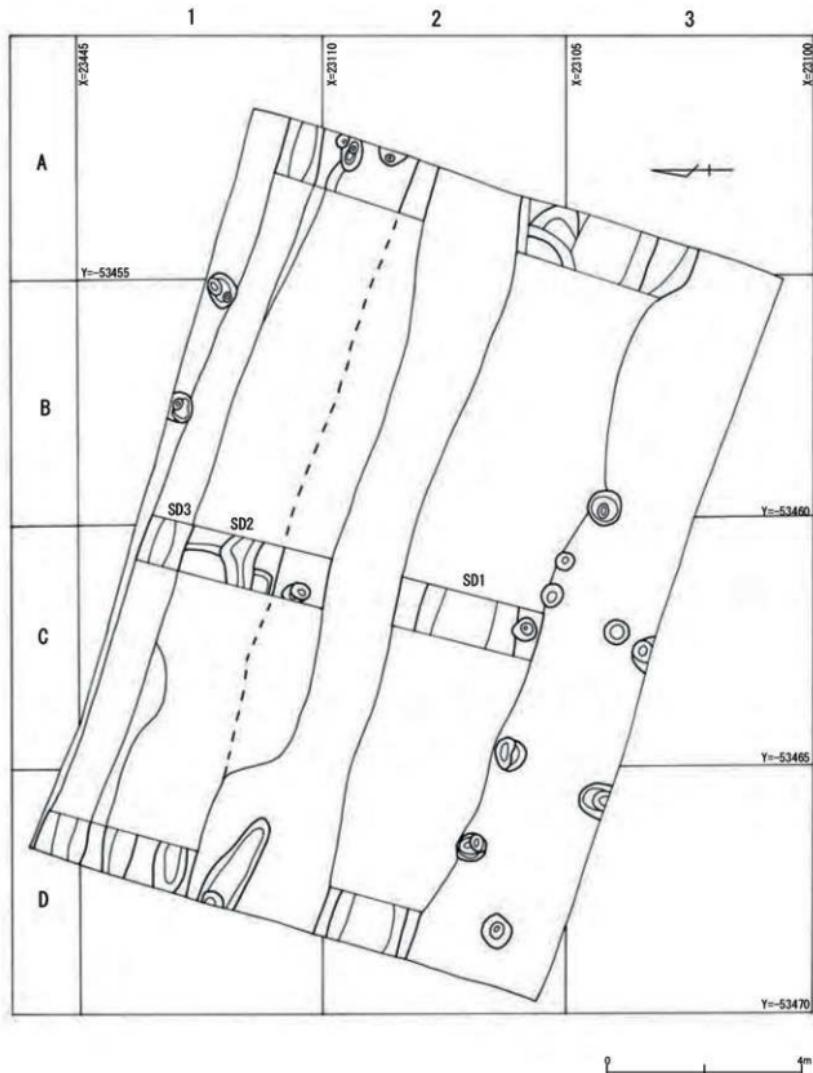
【2号溝】

調査区のやや北寄りを東西に走行する。両端が調査区域外にあるため、全容は不明である。確認できたのは、東西15.8mの範囲である。主軸方位は、N-65°-Eを示す。

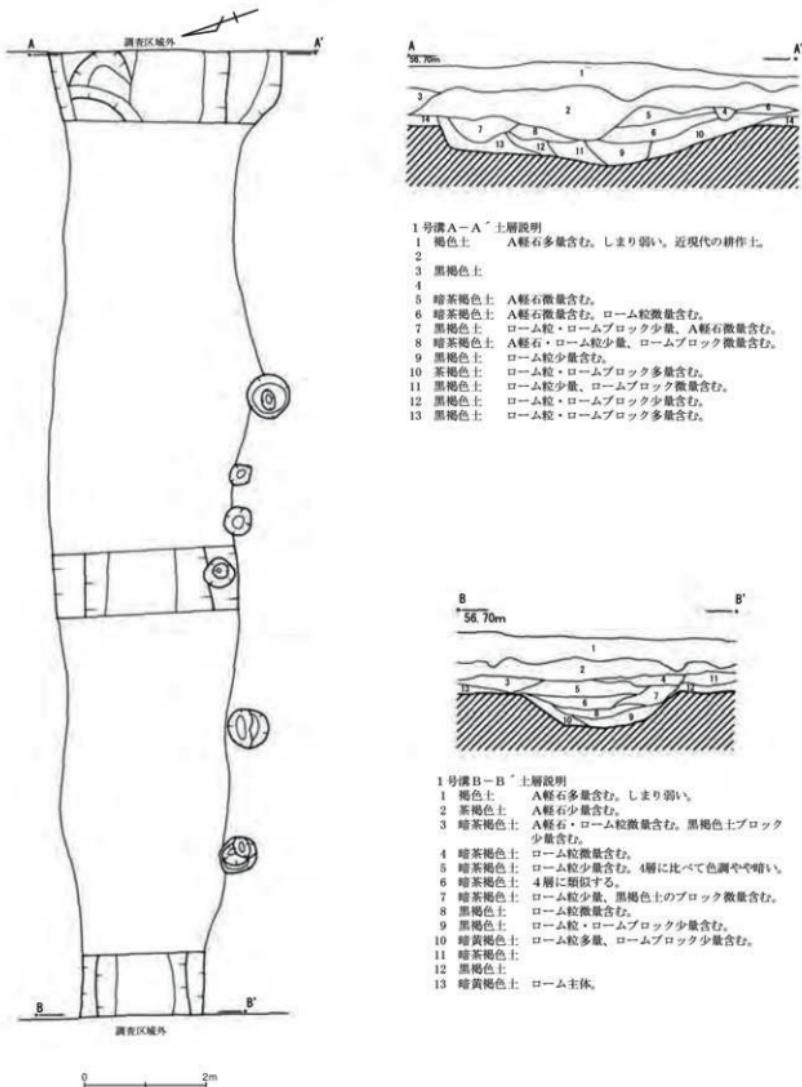
1号溝同様に3本のトレンチを設定し、調査を実施した。

壁は角度をもって掘り込まれ、底面は平坦である。確認面からの深さは、43cmを測る。幅は、183～326cmである。

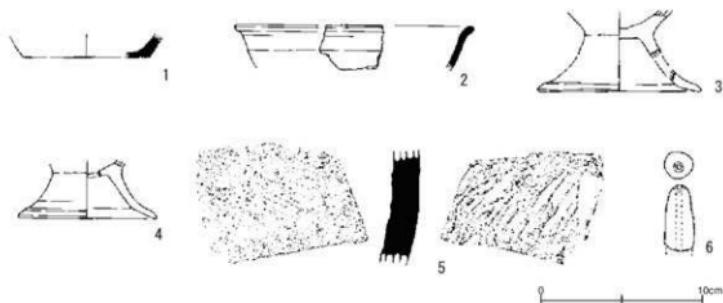
遺物は、出土しなかった。



第12図 熊野遺跡107次調査全測図



第13図 1号溝実測図



第14図 1号溝出土遺物実測図

1号溝出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎 土	残存率	備 考
1	須恵壺?	-	(1.5)	(7.0)	暗灰色	やや悪	長石、褐色粒	図示10%	底部手持ち甌、産地不明
2	須恵高台壇	(14.0)	(2.7)	-	明灰色	普通	石英、長石、片岩、褐色粒	図示7%	末野
3	台付甌	-	-	(9.7)	明暗褐色	普通	微砂粒	-	破片
4	台付甌	-	(3.5)	(8.2)	赤褐色	普通	微砂粒	図示10%	
5	須恵甌	-	-	-	暗灰色	良好、堅緻	石英、長石	破片	外表面平行叩き、内面青海波+笠ナゲ、末野
6	土鍤	長さ4.0	幅1.2	孔径0.3	重さ11.5g	-	-	70%	

【3号溝】

調査区の中央を東西に走行する。両端が調査区域外にあるため、全容は不明である。確認できたのは、東西15.8mの範囲である。主軸方位は、N-66°-Wを示す。

1号溝・2号溝と同様に3本のトレーンチを設定し、調査を実施した。

壁は角度をもって掘り込まれ、底面は平坦である。確認面からの深さは、24cmを測る。幅は、75～102cmである。

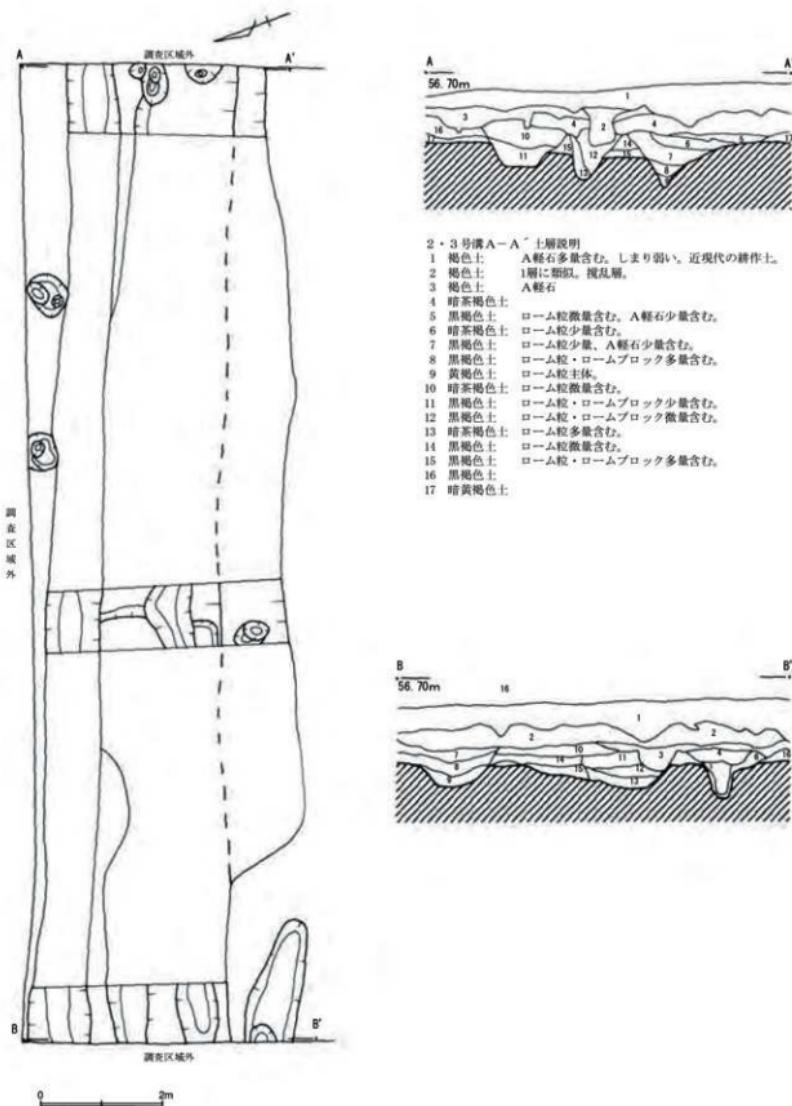
出土遺物には、須恵器甌、土師器壺などがあった。

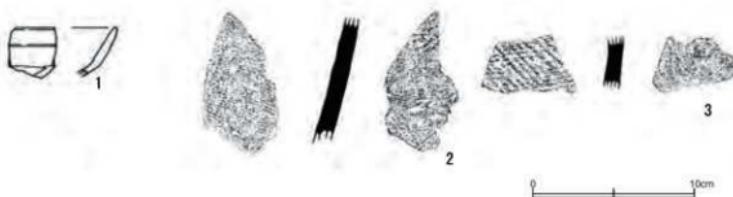
【ピット】

調査区の南端および北端から15基が検出された。直径は48～74cm、深さは16～38cmである。出土遺物はなく、時期は不明である。また、建物等の配列が判明できるものはなかった。

③まとめ

近世の溝3条が検出された。本調査地点から東方の熊野遺跡B区(埼理文調査)や更に東の第61次・90次調査でも本遺構の延長部が検出されており、長さ200m以上に及ぶことが確認できた。





第16図 3号溝出土遺物実測図

3号溝出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎 土	残存率	備 考
1	环	-	-	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、パミス	5%	
2	須恵甕	-	-	-	暗灰色	普通	石英、長石	破片	外曲平行叩き後ナデ、内曲青面波叩き後ナデ、未野
3	須恵甕	-	-	-	灰褐色	普通	石英、長石	破片	外曲平行叩き、内曲青面波叩き後ナデ、未野

(3) 熊野遺跡第118次調査

① 発掘調査の経過

熊野遺跡第118次調査地点は、深谷市岡字熊野2, 912番地4（岡中央土地地区画整理事業地内31街区5画地）である。

周囲は、区画整理事業及び個人住宅建築等により発掘調査が実施されてきた。近接して21次・27次、135次、埼埋文A区などが位置する。調査区中央での標高は、55.0mを測る。

発掘調査は、平成9年11月4日から同年11月21日にかけて実施した。発掘調査面積は、約247m²である。

発掘調査は、まずバックホーによる表土除去から行った。遺構確認面は、表土から50cmほど掘り下げたソフトローム面とした。

表土除去後、遺構確認作業を行い、井戸跡1基、溝3条、土坑4基等を確認した。

遺構確認状況の写真撮影の後、調査区西端の遺構から掘下げを開始した。その後、順次東方の遺構も掘下げていった。

土層断面図の作成は、遺構掘り下げと並行して実施し、その後に平面図を作成した。土層断面図・平面図ともに1/20の縮尺で実測した。

全ての掘り下げ・図化作業が終了した後、全景写真を撮影した。これにより、発掘調査の全工程が終了し、機材等の撤収を行った。

② 遺構と遺物

調査により検出された遺構は、古代の井戸跡1基、中～近世の溝3条・土坑4基・ピット群である。

【1号井戸跡】

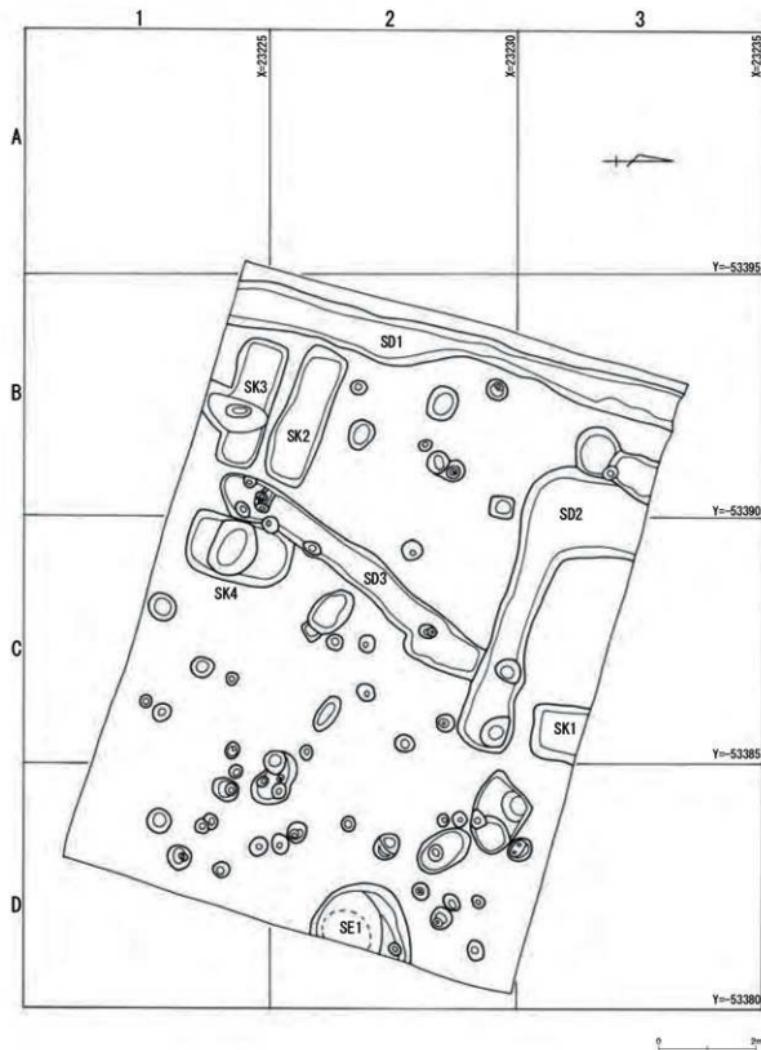
調査区の東端に位置する。東部が調査区域外にあるため、全容は不明である。

平面形態は楕円形を呈すると想定され、直径は2.20mを測る。壁は、南部はほぼ垂直に、北部は角度をもち掘り込まれていた。個人住宅にかかる調査のため、確認面より約1m掘り下げ調査を中止した。この段階での直径は85cmを測ったが、底部の状況は不明である。

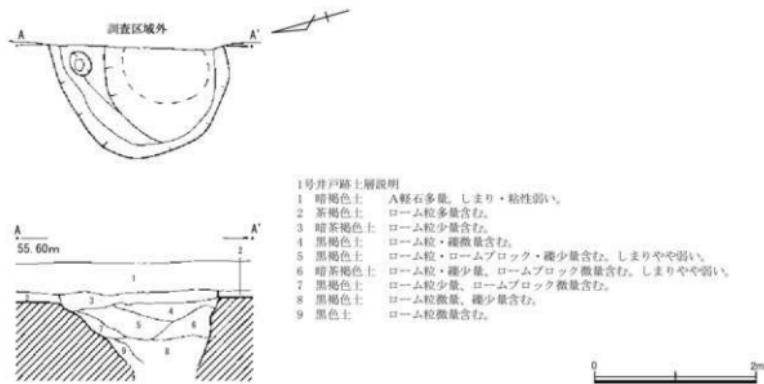
遺物は、土師器の环・皿、須恵器の环・甕が出土した。

【1号溝】

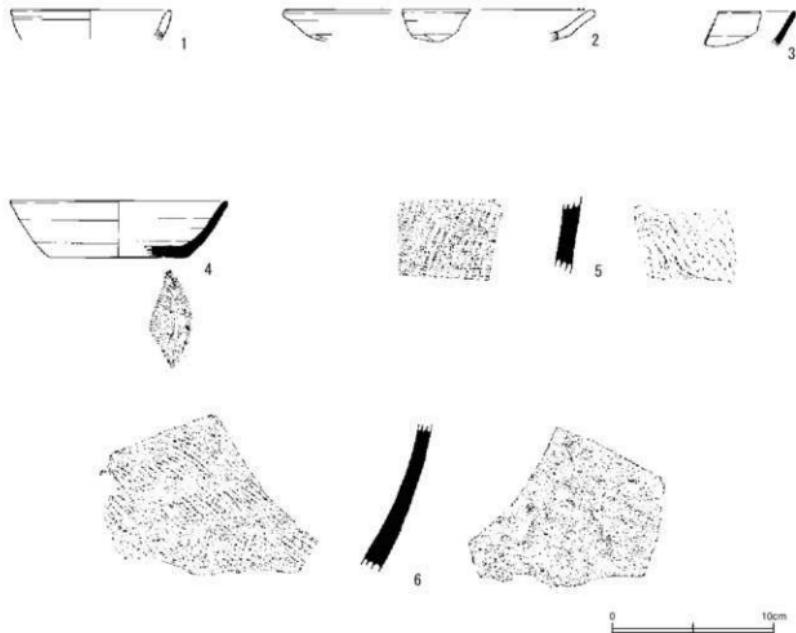
調査区の西端を南北に走行する。両端が調査区域外にあるため、全容は不明である。



第17図 熊野遺跡118次調査全測図



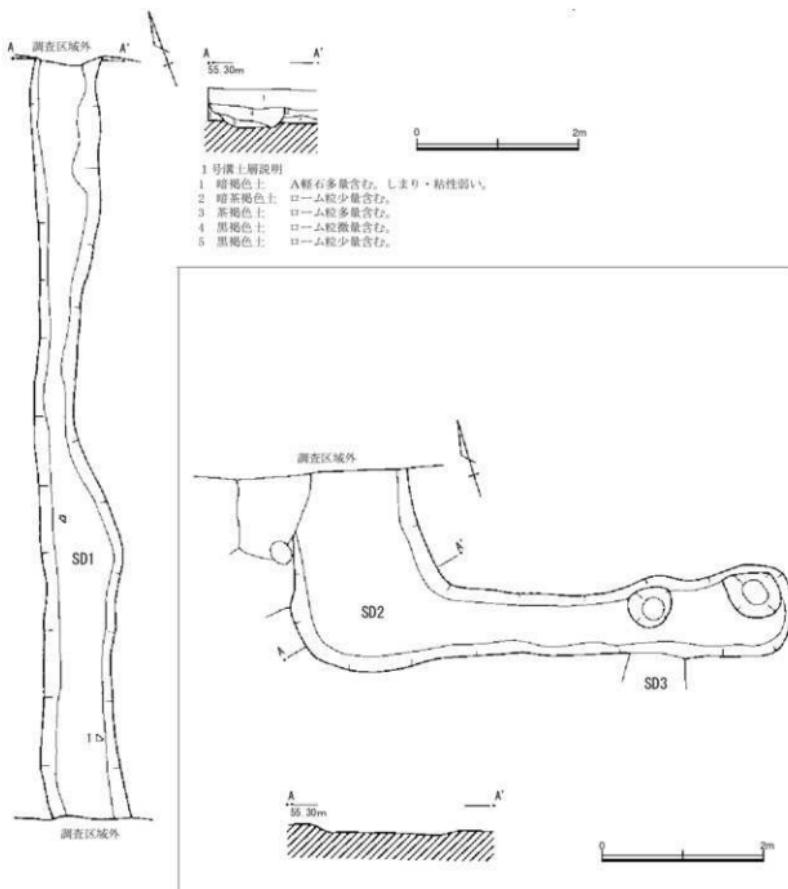
第18図 1号井戸跡実測図



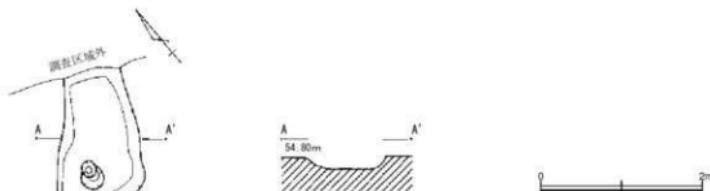
第19図 1号井戸跡出土遺物実測図

1号井戸跡出土遺物観察表

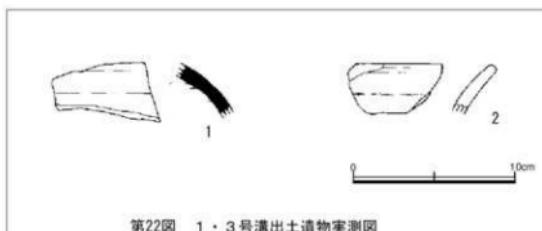
番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	壺	(9.6)	(1.9)	-	橙色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示10%	上層
2	皿	(18.7)	(1.9)	-	明褐色	明褐色	石英、チャート、角閃石	図示5%	上層
3	須恵壺	-	-	-	明灰色	良好	石英、長石、海綿骨針	破片	上層、南比金
4	須恵壺	(13.0)	3.4	(8.2)	淡黄灰褐色	不良	石英、長石、片岩、黑色粒	図示25%	上層、底部周辺回転抜け目 南比金、唇底あり
5	須恵甕	-	-	-	明灰色	良好	石英、長石	破片	上層、外面平行叩き、内面青 海波叩き、末野
6	須恵甕	-	-	-	灰色	良好	石英、長石	破片	上層、外面平行叩き、内面ナ 子、末野



第20図 1・2号溝実測図



第21図 3号溝実測図



第22図 1・3号溝出土遺物実測図

1・3号溝出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎	土	残存率	備考
1	須恵甕	-	-	-	暗灰褐色	普通	石英、長石	破片	SD-1、内外面回転ナデ、末野	
2	甕	-	-	-	褐色	普通	石英、雲母、微砂粒	破片	SD-3	

確認できたのは、長さ9.4mの範囲である。幅は最大で102cmを測り、深さは8cmである。底面は平坦であり、断面形態は皿状を示す。主軸方位は、N-20°-Eを示す。

遺物は、須恵器の甕が出土した。

【2号溝】

調査区の北部に位置する。北端が調査区域外にあるため、全容は不明である。

本遺構は、調査区北部で東から西に走行した後、ほぼ直角に北へ向きを変え、調査区外へと延びる。確認できたのは、長さ8.5mの範囲である。幅は最大で195cmを測り、深さは10cmである。底面は平坦であり、断面形態は皿状を示す。主軸方位は、N-74°-W～N-

6°-Eを示す。

遺物は、出土しなかった。

【3号溝】

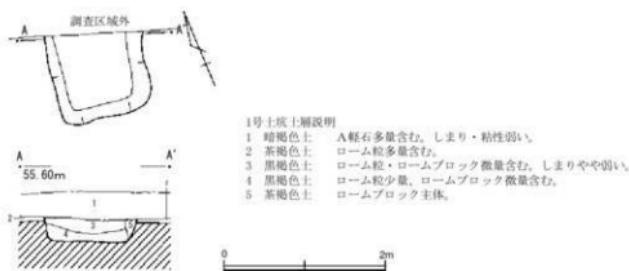
調査区の中央に位置する。北端が2号溝と接する。長さは6.55mで、幅は最大で105cmを測る。底面は平坦で、断面形態は皿状を示す。確認面からの深さは15cmである。主軸方位は、N-36°-Eを示す。

遺物は、土器の甕が出土した。

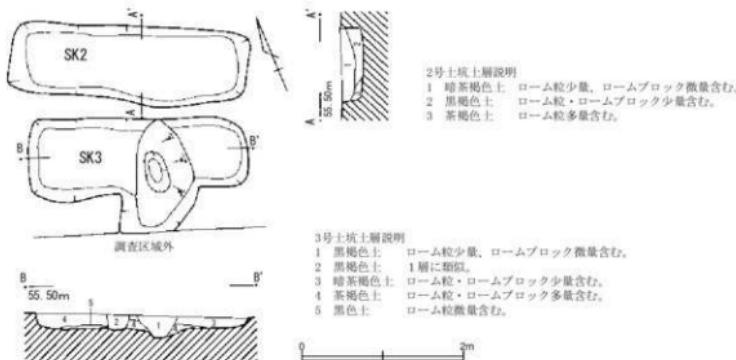
【1号土坑】

調査区の北端に位置する。北部が調査区域外にあるため、全容は不明である。

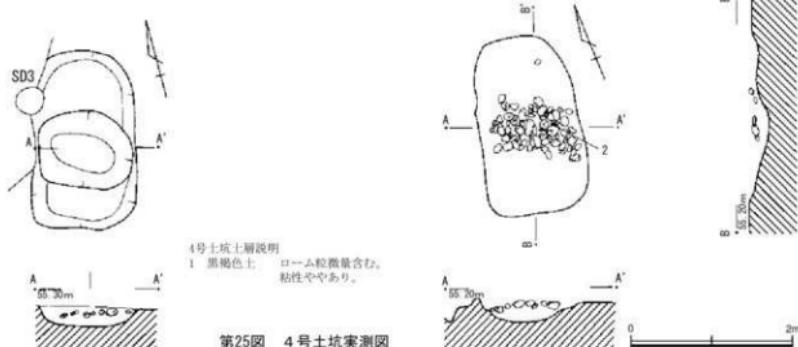
平面形態は、長方形を呈すると想定される。長軸



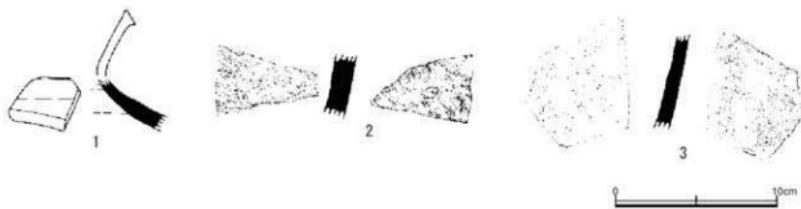
第23図 1号土坑実測図



第24図 2・3号土坑実測図



第25図 4号土坑実測図



第26図 1・4号土坑出土遺物実測図

1・4号土坑出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	須恵器	-	-	-	淡灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	SK-1、未野
2	須恵器	-	-	-	明灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	SK-4、外面平行叩き、未野
3	須恵器	-	-	-	明灰色	普通	長石、黒色粒、海綿骨針(精良)	破片	SK-4、外面平行叩き後ナデ、南比企

110cm以上、短軸115cmを測る。主軸方位は、N-7°-Eを示す。

壁はほぼ垂直に掘り込まれる。底面は平坦で、確認面からの深さは22cmを測る。

遺物は、須恵器の甕が出土した。

【2号土坑】

調査区の南西に位置する。

平面形態は長方形を呈し、長軸291cm、短軸99cmを測る。主軸方位は、N-70°-Wを示す。

壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。確認面からの深さは、28cmを測る。

遺物は、出土しなかった。

【3号土坑】

調査区の南西に位置する。

平面形態は長方形を呈するが、中央部で土坑と重複する。長軸272cm、短軸101cmを測る。主軸方位は、N-68°-Wを示す。

壁はやや角度をもち掘り込まれ、底面は若干の凹凸をもつ。確認面からの深さは、20cmを測る。

遺物は、出土しなかった。

【4号土坑】

調査区の南部に位置する。

平面形態は、隅丸長方形を呈する。長軸218cm、短軸130cmを測る。主軸方位は、N-20°-Eを示す。

壁はやや角度をもち掘り込まれる。底面は凹凸をもち、中央部が楕円形に掘り込まれる。円形部の直径は、114cmを測る。確認面からの深さは、24cmを測る。

遺物は、須恵器の甕の破片が出土した。また、中央部の覆土上層から中層にかけて、礫が集中して出土した。

④まとめ

調査区東端で検出された井戸跡は、8世紀前半以降である。他の遺構は、覆土の状況から古代に廻るものではないと想定される。

(4) 熊野遺跡第122次調査

① 発掘調査の経過

熊野遺跡第122次調査地点は、深谷市岡字千手堂1,880番地4である。

周囲では、岡部西小学校建設や道路拡幅に先立ち発掘調査が実施されている。調査区中央での標高は、54.1mを測る。

発掘調査は、平成9年12月8日から同年12月20日にかけて実施した。発掘調査面積は、約110m²である。

発掘調査は、まずバックホーによる表土除去から行った。遺構確認面は、表土から30cmほど掘り下げたソフトローム面とした。

表土除去後、遺構確認作業を行い、竪穴住居跡4軒、土坑4基などを確認した。

遺構確認状況の写真撮影の後、調査区北東に位置する1号住居跡から掘り下げを開始した。その後、順次他の遺構も掘り下げていった。

途中、土器類が出土したので、なるべく元位置を留めながら掘り下げを続け、床面を検出した段階で遺物出土状況の写真撮影を実施し、遺物出土状況図を作成した。また、土層断面図の作成も、遺構掘り下げと並行して実施し、その後に平面図を作成した。

全ての掘り下げ・図化作業が終了した後、全景写真を撮影した。これにより、発掘調査の全工程が終了し、機材等の撤収を行った。

② 遺構と遺物

調査により検出された遺構は、飛鳥～平安時代の竪穴住居跡4軒、近世以降の土坑4基などである。

【1号住居跡】

1号住居跡は、調査区東側に位置する。耕作により住居跡上面が削平されていた。2・3号住居跡と重複し、断面観察から本住居跡が最も新しいことが判明した。

平面形態は略方形で、規模は長軸約4.8m、短軸約4.6m、深さ約0.3m、を測る。主軸方位はN-51°-Eを示す。

床面は2枚の貼床が確認されており、旧床面の貼床は最終床面(10, 11層)より東側の幅が狭く、住居が東側に拡張されたものと考えられる。床面は両面とも

よく踏み固められていた。

壁溝は幅0.3～0.4m、深さ約0.1mを測り、全周する。

カマドは、東壁側のやや南寄りに設置されていた。袖は灰白色粘土と砂質土の造り付けで、両袖には土師器甕が補強材として使われていた。燃焼部の幅は約0.5mで、煙道部は一部擾乱により壊されているが、焚き口から煙道部までの長さは約1.2mであった。火床面は平坦で、燃焼部には土師器甕が逆位で残されていた。おそらく支脚として使われたものと推定される。

ピットは最終床面で6基、旧床面で6基が検出された。最終床面のP1～P4は柱穴と思われる。

出土遺物は、覆土中から土師器甕・甕、須恵器甕・蓋・甕、磨痕石、貼床下から土師器暗文甕、砥石等が出土した。1～7、9、10は北武藏型甕で、丸底のものと平底化したものがある。11は皿、12～14は北武藏型暗文甕である。12、14は貼床下から出土したもので丸底のもの、13は平底化した暗文甕で、前者より後出的である。16～25は土師器甕で、19以外はすべてカマド出土である。いずれも胴部上位に膨らみをもつが、18、19はやや弱い。26、27は須恵器蓋、28、29は須恵器甕。28は底部全面回転範ケズリでケズリは浅く、口縁部が直線的にのびる。29は内湾ぎみ。30は甕で、内外面にハケメ調整を施す。須恵器はすべて末野産である。31は砥石で、使い減りが著しい。32は表裏に研磨痕のある石で、磨り石として使用されたものであろうか。

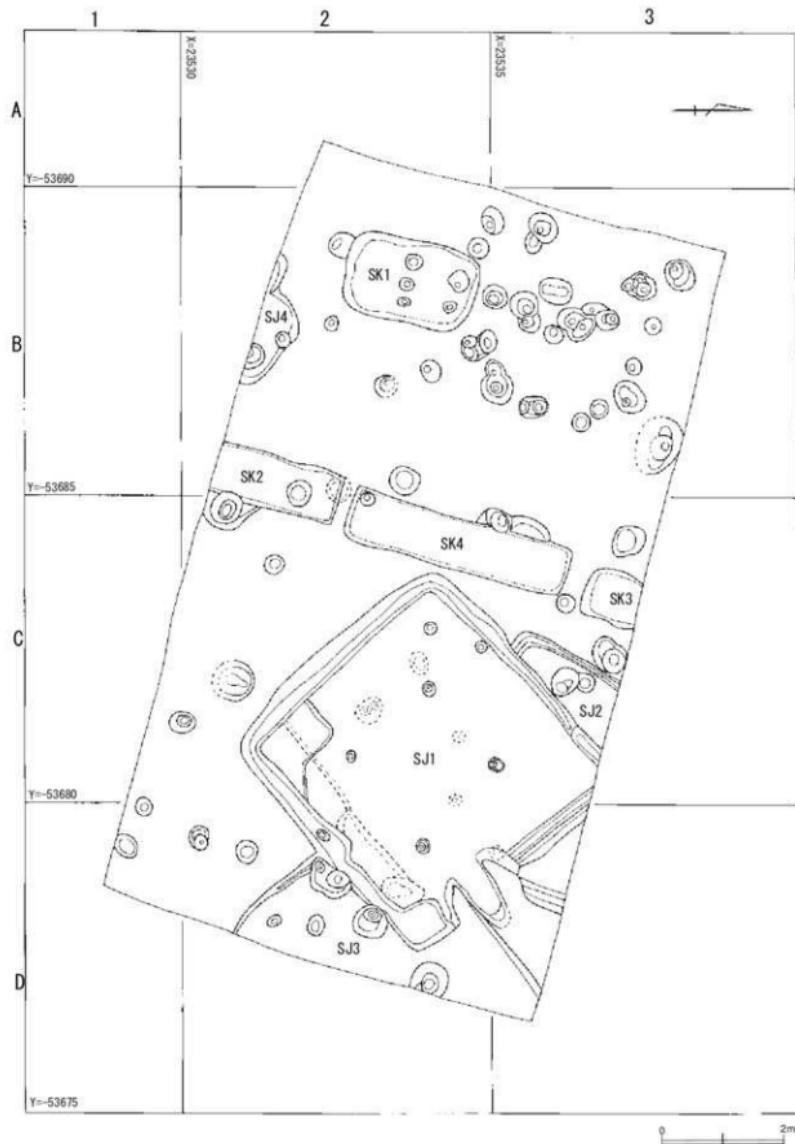
住居の時期は、床面の構造および出土遺物から、2時期に分かれるものと思われる。第1期は7世紀後半～8世紀初頭、第2期は8世紀前半と考えられる。

【2号住居跡】

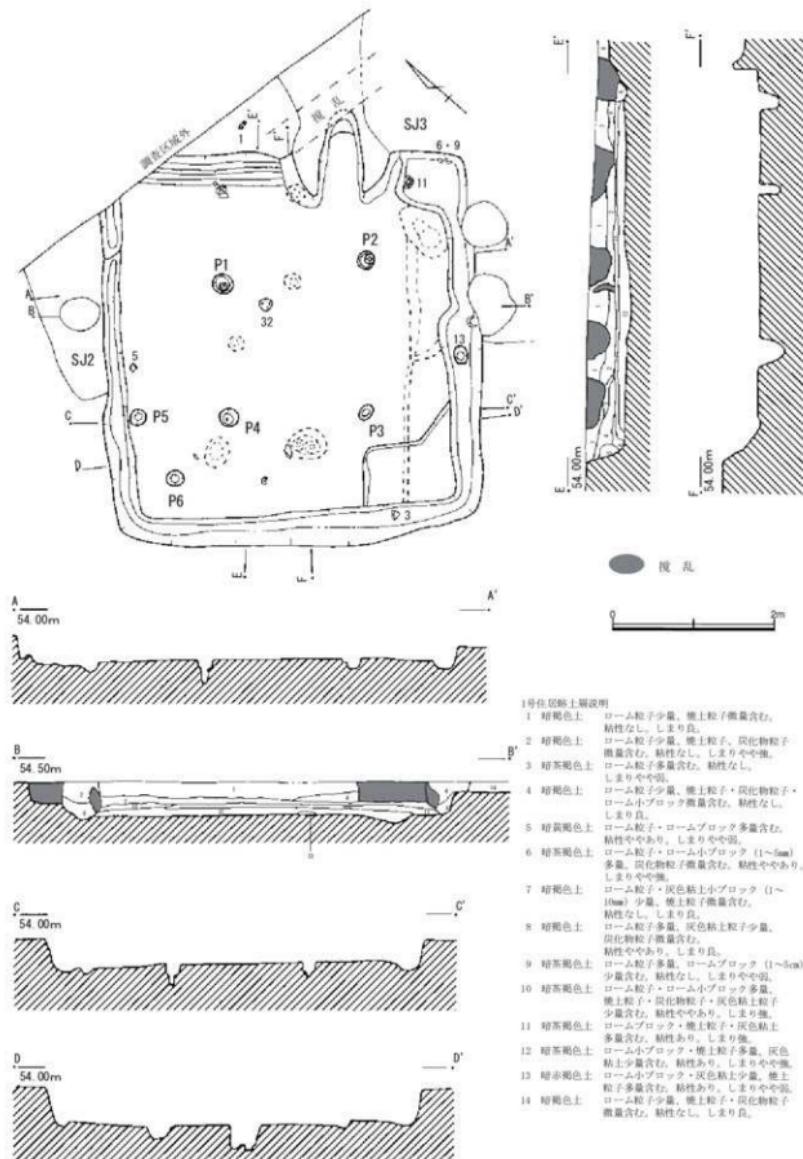
2号住居跡は、調査区東側に位置する。住居の大半が1号住居跡に切られており、また北壁側が調査区外のため全容は不明である。

平面形態は方形または長方形と思われ、規模は残存する東西軸で約3.8m、深さは約0.2mを測る。

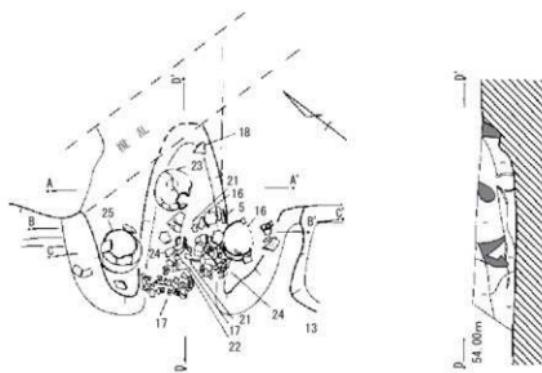
床面はほぼ平坦である。壁溝は西壁側で幅約0.2m、深さ約7cm、東壁側で幅約0.3m、深さ約4cmを測る。



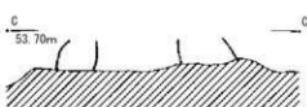
第27図 熊野遺跡122次調査全測図



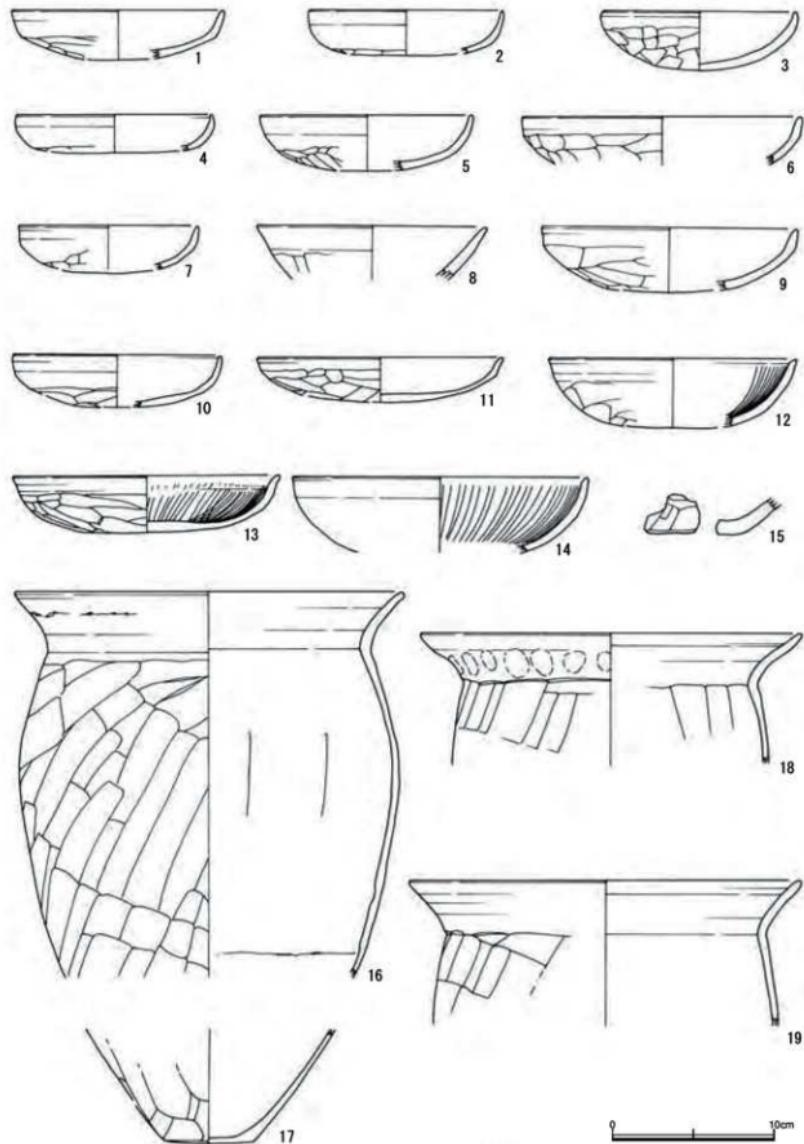
第28図 1号住居跡実測図



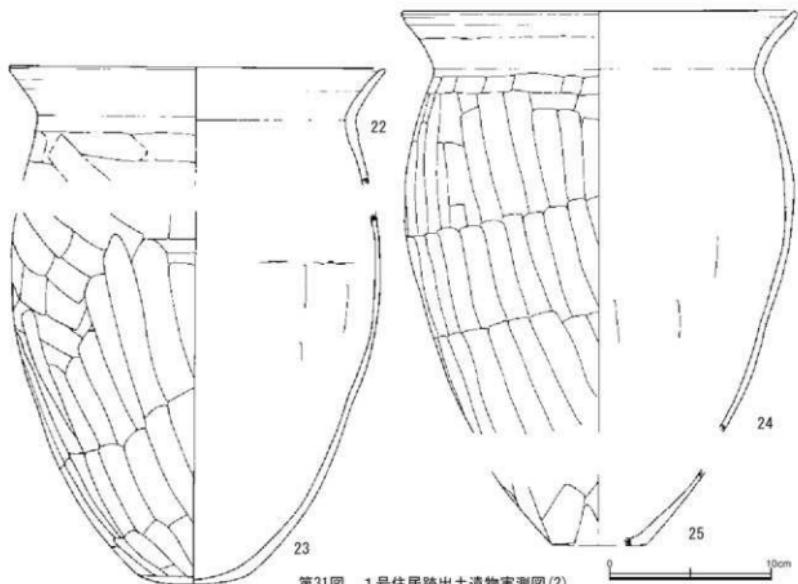
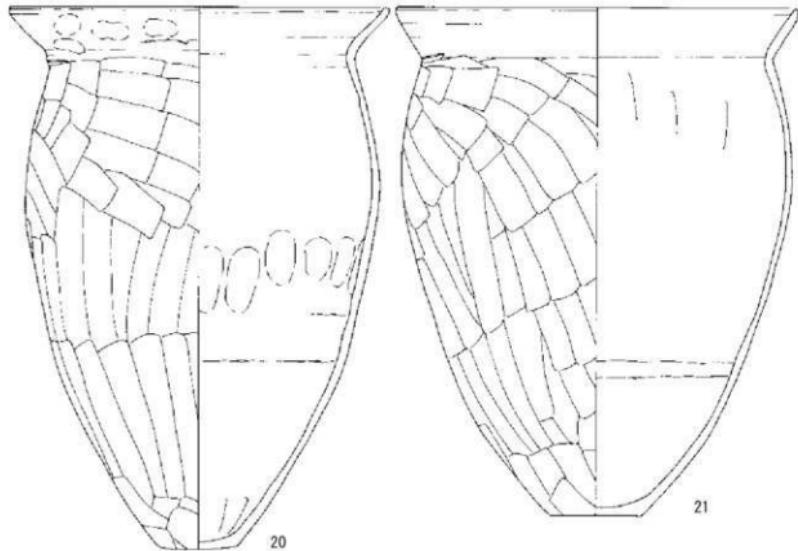
- 1号住居跡カマド実測図
- 1 緑灰褐色土 ローム粒子微量、他土粒子少量、緑灰色粘土多量含む。
粘性あり。しまり強。
- 2 緑灰褐色土 ローム粒子微量、他土粒子・緑灰色粘土多量含む。
粘性や少あり。しまり良。
- 3 緑茶褐色土 ローム粒子微量、他土粒子・灰色粘土少量含む。
粘性なし。しまり弱。
- 4 緑茶褐色土 ローム粒子微量、他土粒子・炭化物粒子少量、灰色粘土多量含む。
粘性なし。しまり弱。
- 5 緑茶褐色土 ローム粒子微量、他土粒子多量、炭化物粒子・灰色粘土少量含む。
粘性や少あり。しまりやや弱。
- 6 緑茶褐色土 ローム粒子微量、他土粒子・炭化物粒子多量、灰色粘土少量含む。
粘性なし。しまり弱。
- 7 緑灰茶褐色土 ローム小ブロック・他土粒子少量、灰色粘土多量、ローム粒子微量含む。
粘性なし。しまり弱。
- 8 緑茶褐色土 ローム粒子多量、灰色粘土・他土粒子少量含む。
粘性や少あり。しまりやや弱。
- 9 緑茶褐色土 灰色粘土・他土粒子・ローム粒子少量含む。
粘性や少あり。しまりやや弱。
- 10 緑茶褐色土 ローム小ブロック・他土粒子・炭化物粘土少量含む。
粘性や少あり。しまり弱。
- 11 緑茶褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック多量、他土粒子少量含む。
粘性なし。しまり弱。



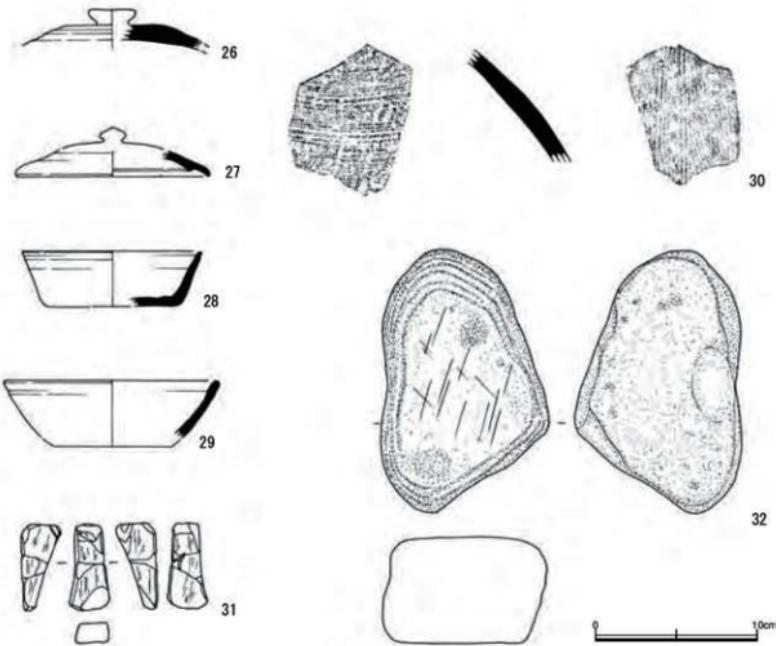
第29図 1号住居跡カマド実測図



第30図 1号住居跡出土遺物実測図(1)



第31図 1号住居跡出土遺物実測図(2)



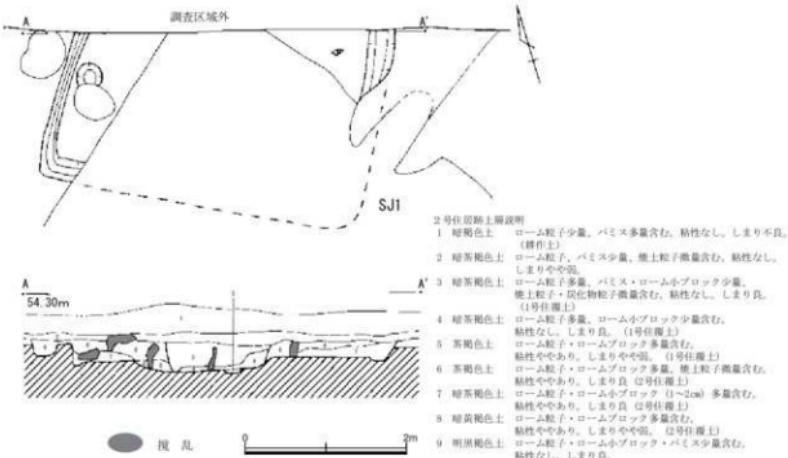
第32図 1号住居跡出土遺物実測図(3)

1号住居跡出土遺物観察表(1)

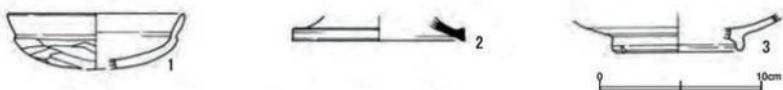
番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	环	(12.8)	(3.1)	-	明褐色	普通	石英、角閃石	図示20%	覆土
2	环	(11.7)	(2.8)	-	暗褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示30%	覆土
3	环	(11.6)	3.6	-	明褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	35%	図示
4	环	(11.8)	(2.4)	-	灰褐色	やや悪	石英、角閃石	図示15%	力マド
5	环	(12.7)	(3.4)	-	にぶい灰褐色	良好	雲母、角閃石、(結晶)	図示20%	図示
6	环	(16.8)	(3.0)	-	橙~灰褐色	普通	石英、雲母、微砂粒	図示30%	図示
7	环	(16.8)	(2.9)	-	明茶褐色	普通	石英、角閃石	図示15%	覆土
8	环	(13.3)	(3.3)	-	暗茶褐色	普通	石英、微砂粒	図示20%	覆土、跡?
9	环	(15.4)	(4.0)	-	灰褐色~灰黑色	普通	石英、雲母、微砂粒	図示20%	図示
10	环	12.4	3.2	-	暗灰褐色	やや悪	石英、角閃石、長石	60%	力マド、磨滅やあり
11	环	14.8	2.7	-	灰黑~棕褐色	普通	石英、雲母、角閃石	60%	図示、3往P1と接合
12	环	(14.9)	(4.2)	-	にぶい褐色	普通	石英、チャート、角閃石、砂粒	図示10%	貼床下-格、内面放射状暗文
13	环	16.1	3.4	-	灰黑~棕褐色	普通	石英、雲母、微砂粒	70%	図示、内面放射状暗文
14	环	(17.7)	(4.7)	-	暗褐色	普通	石英、角閃石、チャート、砂粒	図示35%	貼床下-格、内面放射状暗文
15	瓶	-	-	-	灰棕褐色	良好	石英、長石、砂粒	破片	貼床下-格
16	甕	(23.4)	(23.8)	-	暗褐色	普通	微砂粒多量	図示45%	力マド図示
17	甕	-	(7.3)	3.5	暗赤褐色	普通	微砂粒多量	図示30%	力マド図示
18	甕	(22.8)	(8.1)	-	暗褐色	普通	雲母、微砂粒	図示20%	力マド図示
19	甕	(23.7)	(8.9)	-	明暗褐色	普通	砂粒多量	図示15%	貼床下-格
20	甕	22.8	33.2	4.8	暗褐色~灰褐色	普通	微砂粒多量	60%	力マド図示
21	甕	(24.3)	31.0	(5.5)	暗褐色	普通	微砂粒多量	60%	力マド図示
22	甕	(22.6)	(7.2)	-	暗褐色	普通	微砂粒多量	図示45%	力マド図示
23	甕	-	(22.9)	6.6	暗暗褐色	普通	微砂粒多量	図示80%	力マド図示
24	甕	(23.7)	(25.8)	-	暗褐色	普通	微砂粒多量	図示60%	力マド図示

1号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
25	甕	-	(4.7)	(5.8)	黒褐色～棕褐色	普通	微砂粒多量	図示40%	力マダ田示
26	須恵壺	-	-	-	灰褐色	普通	石英、長石、片岩	図示25%	力マダ、末野
27	須恵壺	(11.8)	(1.6)	-	明灰色	良好	長石、片岩	図示10%	覆土、木野
28	須恵壺	(10.8)	3.4	(7.8)	淡灰色	普通	石英、長石、黑色粒	25%	覆土、底部浅い回転擦けざり、木野
29	須恵壺	(12.9)	(3.5)	-	灰褐色	やや悪	石英、長石、黑色粒	図示10%	覆土、末野
30	須恵甕	-	-	-	灰褐色	普通	石英、長石、片岩	破片	貼床下-括
31	甕石	長さ 5.3cm	幅 2.5cm	厚さ 2.4cm	重さ 23.0g	石質凝灰岩			貼床下-括
32	磨痕石	長さ 10.1cm	幅 10.3cm	厚さ 6.5cm	重さ 1.7kg	石質安山岩			図示、砥石か?



第33図 2号住居跡実測図



第34図 2号住居跡出土遺物実測図

2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	环	(10.7)	(3.4)	-	にぶい棕褐色	普通	石英、角閃石、雲母、微砂粒	50%	図示
2	須恵高盤	-	(1.5)	(10.5)	灰褐色	普通	石英、長石	図示20%	覆土、末野
3	灰釉高台皿	-	(2.2)	(7.7)	淡灰色	良好	長石(精良)	図示7%	覆土、東海産、混入

ピットは西壁際に 1 基検出したが、深さ 10cm 程で浅い。

出土遺物は少なく土師器壺・甕片、須恵器高盤、灰釉高台皿が出土した。1 の土師器壺は横倣壺で、2 は高盤の脚、3 の灰釉高台皿は東海産で混入と思われる。

住居の時期は不明確であるが、1 号住居跡との切り合い関係と土師器壺の年代から 7 世紀前半～中葉と考えたい。

【3号住居跡】

3号住居跡は、調査区東端に位置する。1号住居跡に住居の南西部を切られている。

平面形態は方形ないし長方形と考えられるが、大半が調査区外であり規模は不明である。

床面は概ね平坦でよくしまっていた。壁溝は西壁側で一部検出した。

ピットは 5 基検出した。P1、P2 は主柱穴と思われるが、P3 は造構に伴わない。

カマドは検出されなかった。

遺物は少なく、土師器壺と甕の破片が出土した。1 は北武藏型壺で、口縁部が直立する。2 の甕は口縁部の開きが強い。長脚甕か。

住居の時期は不明確であるが、第 1 号住居との重複関係から 7 世紀中葉～後半と考えられる。

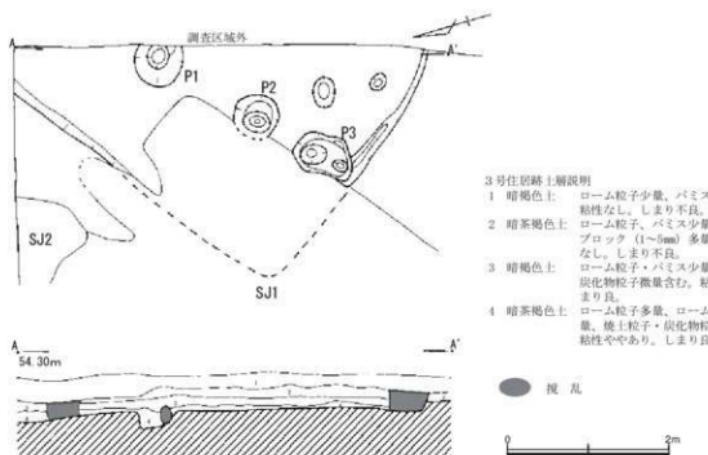
【4号住居跡】

4号住居跡は、調査区の南西部に位置する。造構の南側半分が調査区外のため、全体の規模は不明である。

平面形態は方形ないし長方形と思われる。残存規模は東西軸で約 1.6m、深さ約 0.2m、主軸方位は N 54° -W を示す。

床面は概ね平坦であるが、しまりはなかった。壁溝は検出されなかった。

カマドは大半が調査区外のため規模の詳細は不明だが、灰色粘土と焼土を検出したためカマドとした。



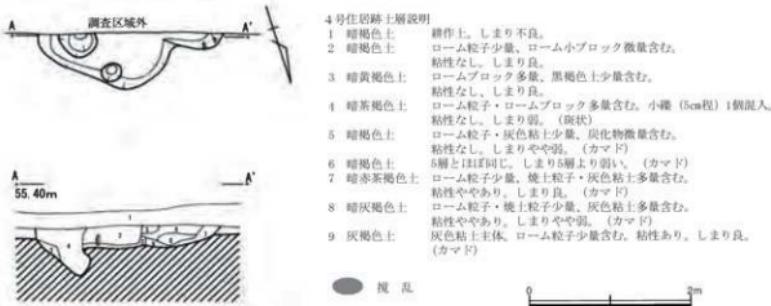
第35図 3号住居跡実測図



第36図 3号住居跡出土遺物実測図

3号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	壺	(12.6)	(2.7)	-	明赤褐色	普通	微砂粒	図示7%	P1覆土、内面放射状暗文
2	甕	(20.8)	(3.0)	-	暗灰赤褐色	普通	石英、長石、角閃石、砂粒多	図示15%	P3覆土
3	甕	-	(2.9)	(4.8)	灰褐褐色	普通	石英、チャート、角閃石、砂粒	図示45%	P1覆土



第37図 4号住居跡実測図

ピットは2基検出したが、遺構には伴わない。

出土遺物はなく、時期も不明である。なお住居としたが、規模も小さく不明確な点が多いことから、堅穴状遺構とするのが妥当かもしれない。

【1号土坑】

1号土坑は、調査区西側に位置する。南東に隣接して4号住居跡がある。

平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸約2.1m、短軸約1.3m、深さ約0.3mである。主軸方位はN-15°-Eを示す。埋土はロームブロックを多量に含む黒褐色土である。

出土遺物は混入と思われる土器師、須恵器甕の破片(図1、2)が出土している。

時期は不明確だが中世と推定される。

【2号土坑】

2号土坑は、調査区中央部の南端に位置し、隣接する4号土坑と主軸をそろえて直列する。

平面形態は南側が調査区外のため全容は不明であるが、長方形と考えられる。規模は残存長約2.1m、短軸約0.9m、深さ約0.4mである。主軸方位はN-17°-Eを示す。埋土はロームブロックを含む黒褐色土を主体とする。

出土遺物はない。時期は不明確であるが、中世と考えられる。

【3号土坑】

3号土坑は、調査区中央部の北端に位置し、隣接する4号土坑と主軸をそろえて直列する。

平面形態は長方形ないし方形と思われる。規模は北

側の大半が調査区外のため、全容は不明である。残存長約0.9m、短軸約0.8m、深さ約0.4m、主軸方位はN-15°-Eを示す。埋土はロームブロックを多量に含む黒褐色土である。

遺物は、土製支脚が出土した。時期は不明確だが、中世と考えられる。

【4号土坑】

4号土坑は、調査区中央部に位置する。2、3号土坑の間にあり、主軸を描えて直列する。

平面形態は長方形で、規模は長軸約3.7m、短軸約0.8m、深さ約0.4m、主軸方位はN-15°-Eを示す。埋土は2、3号土壌と同様ロームブロックを多量に含む

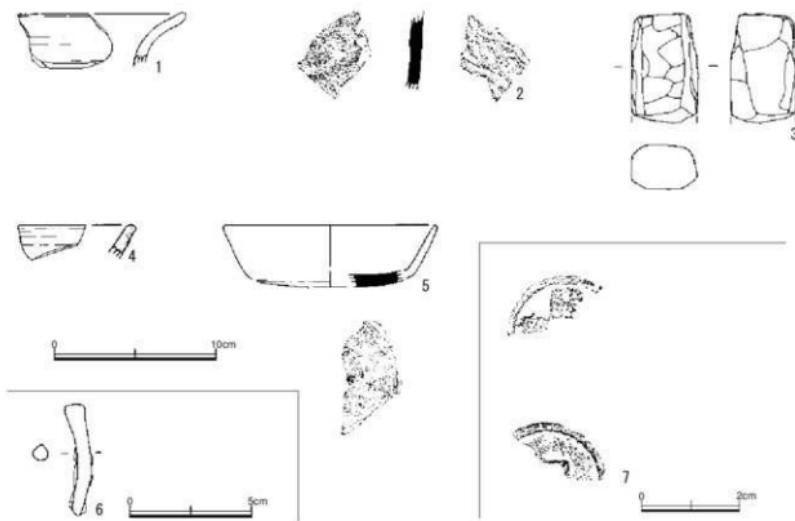
黒褐色土主体である。

出土遺物は常滑の鉢、須恵器坏、鉄釘があるが、須恵器坏は混入と思われる。時期は中世と考えられる。

【ピット・表探遺物】

ピットは調査区全域に分布するが、2～4号土坑の西側に集中するようである。形態は円形を基調に楕円形のものも含まれる。中世の土坑を切っているものが多く、分布に規則性のみられるものはない。時期は中世以降、近世の所産と考えられる。

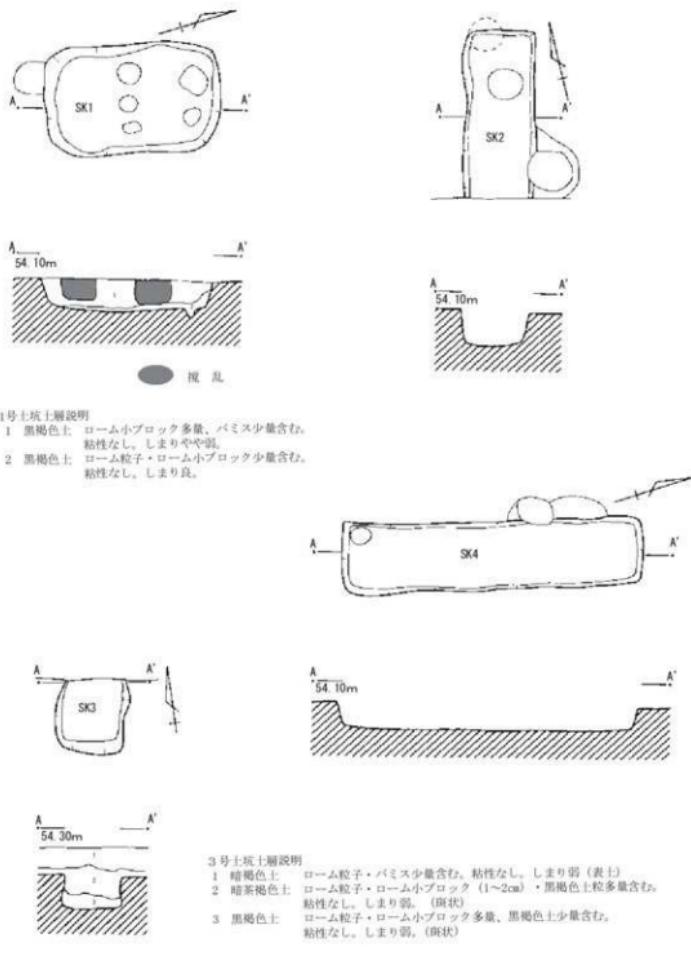
表探遺物7は渡来銭である。大半を欠くが開元通宝と思われる。初鑄は621年（唐）である。



第38図 土坑出土・表探遺物実測図

土坑出土・表探遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	鉢	-	-	-	褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	破片	SK1、覆土
2	須恵器	-	-	-	明灰色	普通	石英、長石	破片	SK1、覆土
3	土製支脚?	長さ6.7cm	幅4.1cm	厚さ2.9cm	灰赤褐色	普通	微砂粒	破片	SK3、覆土
4	鉢	-	-	-	にぶい茶褐色	普通	石英、長石	破片	SK4、覆土、常滑
5	須恵器	-	-	-	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒	図示25%	SK4、覆土、木野、混入か
6	鉄釘	長さ4.6cm	幅0.8cm	重さ3.3g				破片	SK4内PH、覆土、鉄釘
7	銭貨							35%	表探



第39図 1~4号土坑実測図

(5) 熊野遺跡第124次調査

① 発掘調査の経過

熊野遺跡第124次調査地点は、深谷市岡字内出2785番地2（岡中央土地区画整理事業地内9街区II画地）である。

周囲は、区画整理事業及び個人住宅建築等により発掘調査が実施されてきた。近接して95次・98次・125次調査区などが位置する。調査区中央での標高は、50.2mを測る。

発掘調査は、平成9年12月15日から同年12月26日にかけて実施した。発掘調査面積は、約70m²である。

発掘調査は、まずバックホーによる表土除去から行った。遺構確認面は、表土から30cmほど掘り下げたソフトローム面とした。

表土除去後、遺構確認作業を行い、竪穴住居跡3軒、溝1条、土坑2などを確認した。

遺構確認状況の写真撮影の後、大溝にトレチを3本設定し、ここから掘り下げを開始した。その後、順次他の遺構も掘下げていった。

土層断面図の作成は、遺構掘り下げと並行して実施し、その後に平面図を作成した。土層断面図・平面図ともに1/20の縮尺で実測した。

全ての掘り下げ・図化作業が終了した後、全景写真を撮影した。これにより、発掘調査の全工程が終了し、機材等の撤収を行った。

② 遺構と遺物

調査により検出された遺構は、奈良時代の掘立柱建物跡1軒、平安時代の大溝1条、中～近世の土坑2基、溝1条である。

【1号住居跡】

調査区の東端に位置する。6号住居跡・1号溝と重複し、切り合い関係から、本遺構が最も古いことが確認されている。

東半部が調査区域外にあるため、全容は不明である。規模は、短軸で4.62m、長軸は5.50m以上を測る。主軸方位は、N-37°-Wである。

壁は角度をもって掘り込まれ、底面は若干の凹凸を

もつ。確認面からの深さは、40cmほどを測る。壁溝は、確認できた範囲では全周した。

カマドは、北壁の北東コーナー寄りで検出された。ただし燃焼部から煙道にかけて搅乱により破壊されている。袖は粘土の造り付けで、左袖94cm、右袖85cm以上を測る。両袖先端部の内側に、補強材として平坦な石材が使用されていた。また、燃焼部中央から支脚として用いられた円柱形の石も検出された。

土坑は2基が検出され、いずれも不整円形を呈する。1号土坑は、直径117cm、深さ27cmを測る。2号土坑は、直径95cm以上、深さ76cmである。ただし、断面観察により2号土坑は住居埋没後に掘削されたことが確認された。

ビットは大小合わせて7基が検出された。いずれも平面形態は円形を呈し、規模の大きいものは直径58～72cm、一方小さいのは直径16～28cmである。

遺物は、土師器の壺・甕・瓶、須恵器の蓋・壺・甕、鉄滓、砥石、磨石がある。

【2号住居跡】

調査区の北端に位置する。

北半部が調査区域外にあるため、規模は不明である。確認できたのは、東西4.65m、南北4.86mの範囲である。平面形態は、方形ないし長方形であると考えられる。ただし南壁中央付近の84cm四方の範囲で地山が残されており、結果的に住居内部に張り出す格好となっていた。

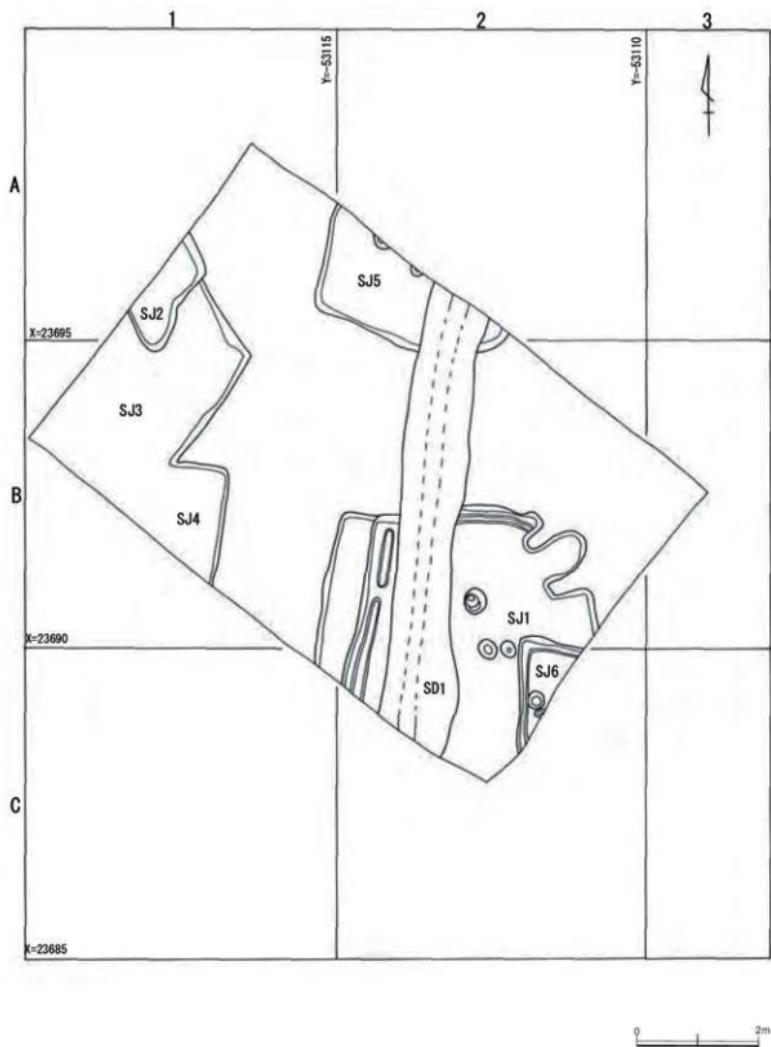
壁は角度をもって掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは、25cmほどを測る。壁溝は、東壁と南壁で確認できたが、それ以外は不明である。

土坑は2基が検出され、いずれも不整円形を呈する。1号土坑は、直径100cm、深さ50cmを測る。2号土坑は北半部が調査区域外にあるため全容は不明であるが、直径78cm以上、深さ30cm以上である。

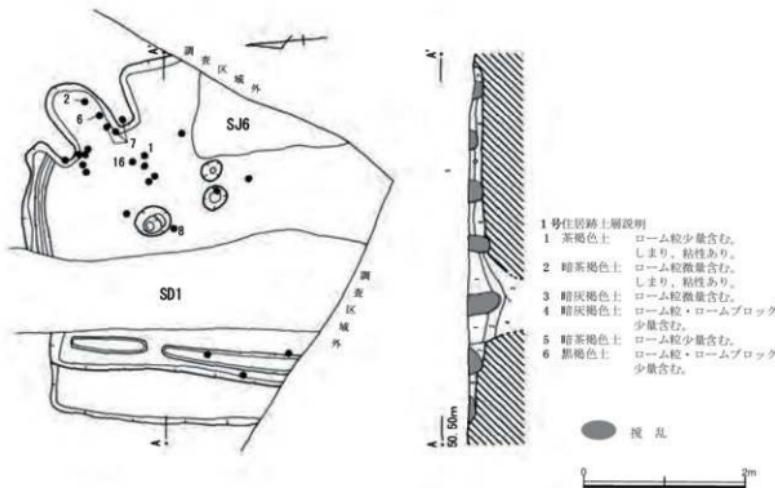
ビットは、南コーナーにおいて1基が検出された。直径49cm、深さ37cmである。

カマドは、調査範囲内では検出されなかった。

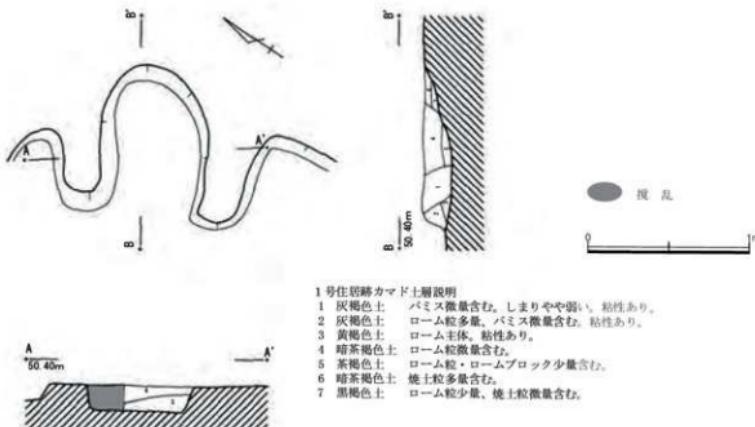
遺物は、土師器の壺・甕、須恵器甕がある。



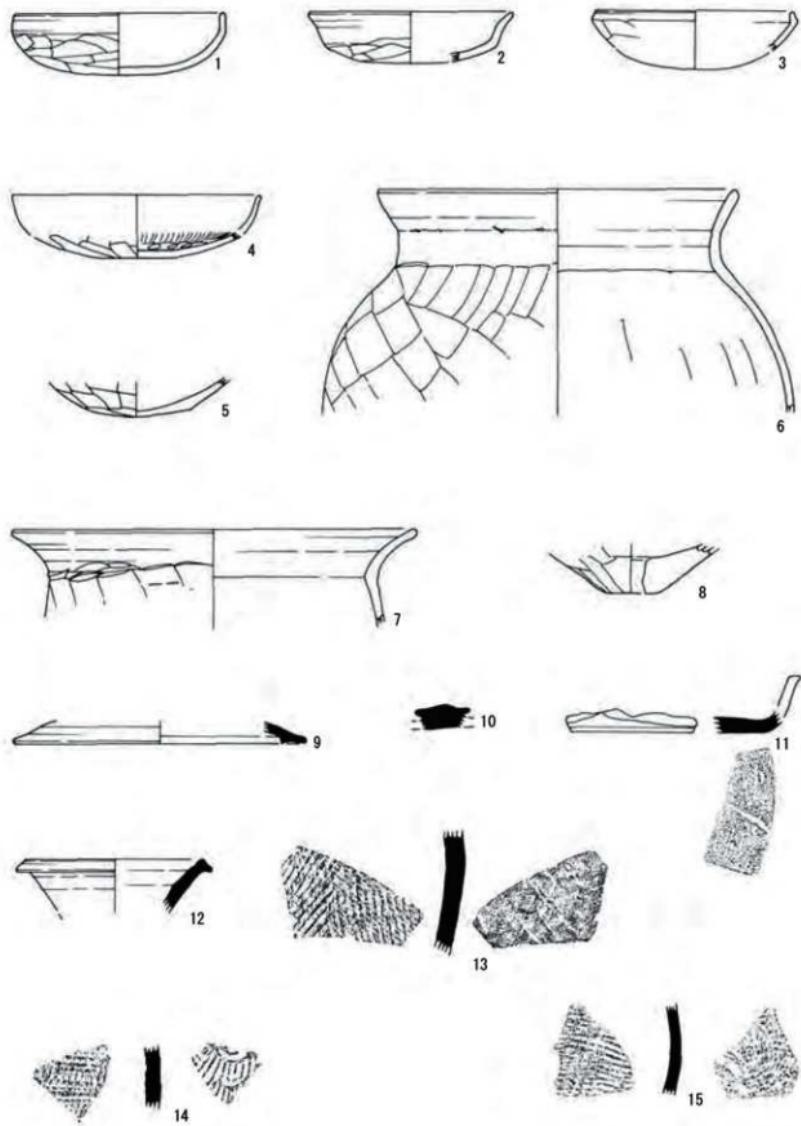
第40図 熊野遺跡124次調査全測図



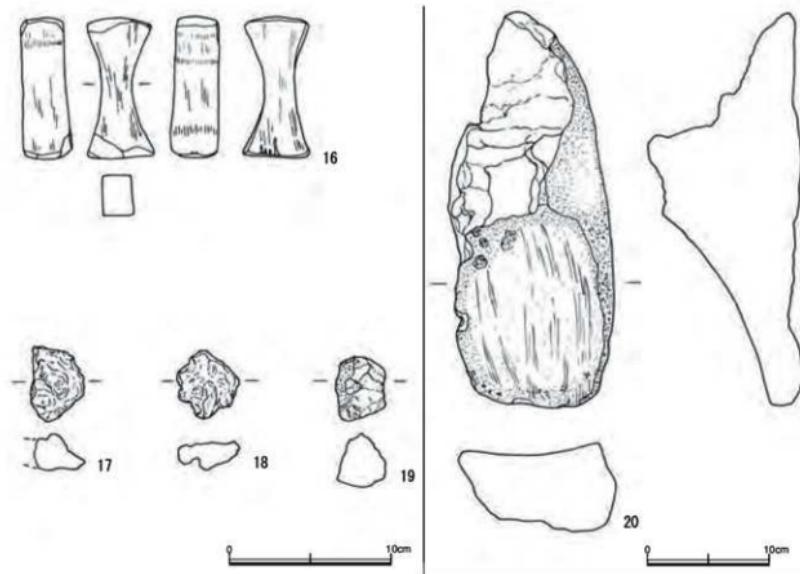
第41図 1号住居跡実測図及び遺物分布状況図



第42図 1号住居跡カマド実測図



第43図 1号住居跡出土遺物実測図(1)



第44図 1号住居跡出土遺物実測図(2)

1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	环	(12.6)	3.8	-	暗褐色	普通	石英、角閃石、黄母	80%	図示、内面油脂状黒斑
2	环	(12.2)	(3.2)	-	暗灰褐色	やや悪	石英、角閃石	図示55%	図示、外面上に油脂状黒斑
3	环	(11.9)	(2.5)	-	暗褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示13%	覆土
4	环	-	(1.6)	-	暗赤褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示55%	カマ一括、内面放射状暗文+螺旋暗文
5	甕	-	(6.7)	-	橙~黒褐色	普通	微砂粒多	図示70%	覆土
6	甕	21.6	(13.8)	-	橙褐色	普通	微砂粒多	図示70%	図示
7	甕	(24.4)	(6.0)	-	橙褐色	普通	微砂粒多	図示20%	図示
8	甕	-	(3.1)	3.4	灰褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示55%	図示
9	須恵器	(17.8)	(1.4)	-	淡灰色	良好	長石、黑色粒	図示7%	覆土、未野
10	須恵器	-	-	-	灰橙色	不良	石英、長石、微砂粒	破片	覆土、唐誠あり
11	須恵盤	-	-	-	淡灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	覆土、未野
12	須恵器	(10.6)	(3.3)	-	淡灰色	普通	石英、長石、黑色粒	図示20%	覆土、未野
13	須恵器	-	-	-	淡灰色	普通	石英、長石、黑色粒	破片	覆土、外曲平行叩き、未野
14	須恵器	-	-	-	灰色	普通	石英、長石	破片	青海波叩き、未野
15	須恵器	-	-	-	灰色	良好	石英、長石、黑色粒	破片	覆土
16	砥石	長さ 8.7cm	幅 4.0cm	厚さ 2.9cm	重さ 117.3g	石質 磨灰岩			図示
17	鉄滓	長さ 4.6cm	幅 3.2cm	厚さ 2.2cm	重さ 40.8g	磁着度 中			覆土、発泡少量、重量感あり
18	鉄滓	長さ 4.3cm	幅 3.8cm	厚さ 1.7cm	重さ 32.3g	磁着度 弱			覆土、内面発泡
19	鉄滓	長さ 4.0cm	幅 3.0cm	厚さ 3.2cm	重さ 10.9g	磁着度 弱			覆土、内面発泡
20	磨石	長さ32.0cm	幅13.2cm	厚さ12.2cm	重さ2120g	石質 安山岩			図示

【3号住居跡】

調査区の東端に位置する。1号溝と重複し、切り合ひ関係から、1号溝の方が新しいことが確認されている。

東半部が調査区域外にあるため、全容は不明である。規模は、短軸で4.62m、長軸は5.50m以上を測る。主軸方位は、N-37°-Wである。

壁は角度をもって掘り込まれ、底面は若干の凹凸をもつ。確認面からの深さは、40cmほどを測る。壁溝は、確認できた範囲では全周した。

カマドは、北壁の北東コーナー寄りで検出された。ただし燃焼部から煙道にかけて搅乱により破壊されている。袖は粘土の造り付けで、左袖94cm、右袖65cm以上を測る。両袖先端部の内側に、補強材として平坦な石材が使用されていた。また、燃焼部中央から支脚として用いられた円柱形の石も検出された。

土坑は2基が検出され、いずれも不整円形を呈する。1号土坑は、直径117cm、深さ27cmを測る。2号土坑は、直径95cm以上、深さ76cmである。ただし、断面観察により2号土坑は住居埋没後に掘削されたことが確認された。

ピットは大小合わせて7基が検出された。いずれも平面形態は円形を呈し、規模の大きいものは直径58～72cm、一方小さいのは直径16～28cmである。

遺物は、4号住居跡との一括であるが、土師器の壺・皿・小型甕、須恵器の長頸瓶・甕がある。

【4号住居跡】

調査区の東端に位置する。1号溝と重複し、切り合ひ関係から、1号溝の方が新しいことが確認されている。

東半部が調査区域外にあるため、全容は不明である。規模は、短軸で4.62m、長軸は5.50m以上を測る。主軸方位は、N-37°-Wである。

壁は角度をもって掘り込まれ、底面は若干の凹凸をもつ。確認面からの深さは、40cmほどを測る。壁溝は、確認できた範囲では全周した。

カマドは、北壁の北東コーナー寄りで検出された。ただし燃焼部から煙道にかけて搅乱により破壊されている。袖は粘土の造り付けで、左袖94cm、右袖65cm以上を測る。両袖先端部の内側に、補強材として平坦な石材が使用されていた。また、燃焼部中央から支脚として用いられた円柱形の石も検出された。

土坑は2基が検出され、いずれも不整円形を呈する。1号土坑は、直径117cm、深さ27cmを測る。2号土坑は、直径95cm以上、深さ76cmである。ただし、断面観察により2号土坑は住居埋没後に掘削されたことが確認された。

ピットは大小合わせて7基が検出された。いずれも平面形態は円形を呈し、規模の大きいものは直径58～72cm、一方小さいのは直径16～28cmである。

遺物は、3号住居跡との一括であるが、土師器の壺・皿・小型甕、須恵器の長頸瓶・甕がある。

【5号住居跡】

調査区の北端に位置する。

北半部が調査区域外にあるため、規模は不明である。確認できたのは、東西4.65m、南北4.86mの範囲である。平面形態は、方形ないし長方形であると考えられる。ただし南壁中央付近の84cm四方の範囲で地山が残されており、結果的に住居内部に張出す格好となっていた。

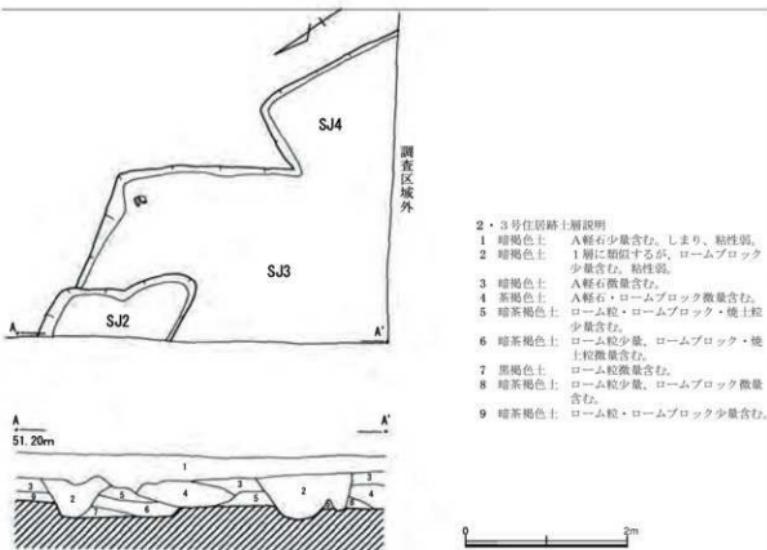
壁は角度をもって掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは、25cmほどを測る。壁溝は、東壁と南壁で確認できたが、それ以外は不明である。

土坑は2基が検出され、いずれも不整円形を呈する。1号土坑は、直径100cm、深さ50cmを測る。2号土坑は北半部が調査区域外にあるため全容は不明であるが、直径78cm以上、深さ30cm以上である。

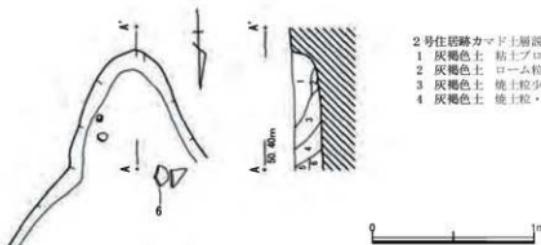
ピットは、南コーナーにおいて1基が検出された。直径49cm、深さ37cmである。

カマドは、調査範囲内では検出されなかった。

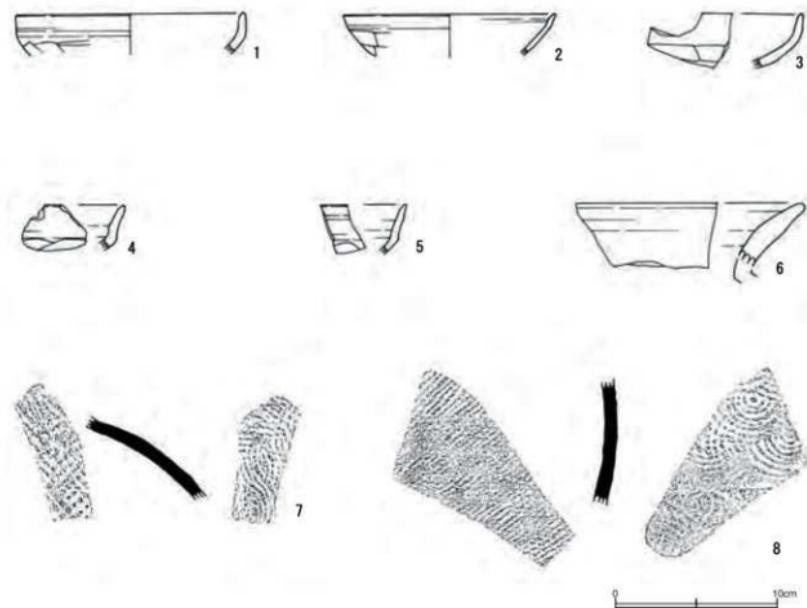
遺物は、土師器の皿と甕がある。



第45図 2・3・4号住居跡実測図



第46図 2号住居跡カマド実測図



第47図 2号住居跡出土遺物実測図

2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	环	(13.8)	(2.6)	-	暗灰橙褐色	普通	石英、白色粒。(精良)	図示20%	カマド一括。内面油脂状黒痕
2	环	(12.8)	(2.6)	-	橙褐色	普通	石英、白色粒。白色粒	図示7%	カマド一括
3	环	-	-	-	暗褐色	やや悪	石英、角閃石	破片	カマド一括
4	环	-	-	-	にぶい橙褐色	やや悪	石英、雲母。(精良)	破片	カマド一括
5	环	-	-	-	暗褐色	普通	石英、角閃石。(精良)	破片	カマド一括
6	甕	-	-	-	灰橙褐色	普通	石英、雲母、角閃石、赤色粒	破片	カマド図示
7	須恵甕	-	-	-	灰褐色	良好	石英、長石	破片	カマド一括。外面平行叩き、内面青海波叩き、木野
8	須恵甕	-	-	-	暗灰色	良好	石英、長石	破片	カマド一括。外面平行叩き、内面青海波叩き、木野

【6号住居跡】

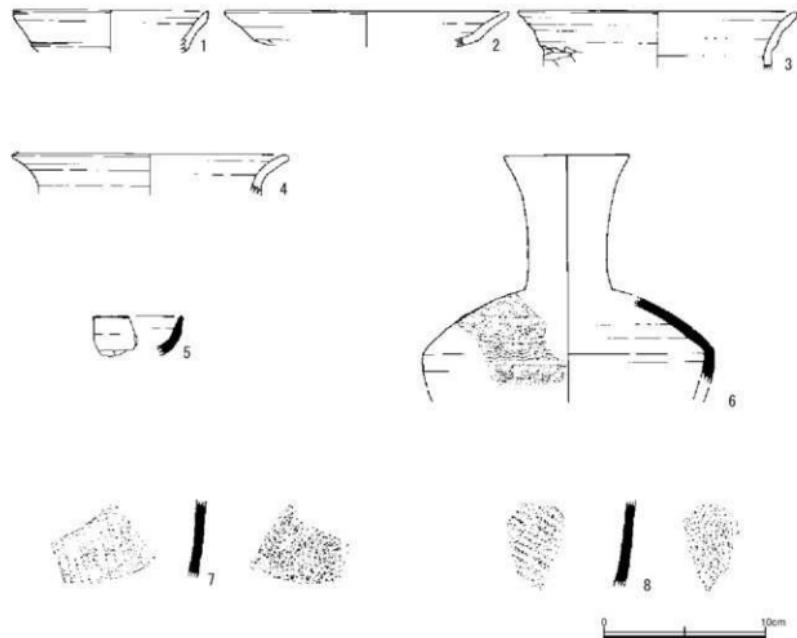
調査区の南東に位置する。1号住居跡と重複し、切り合ひ関係から本遺構の方が新しいことが判明している。

遺構の南部及び東部が調査区域外にあるため、規模等は不明である。平面形態は、長方形ないし正方形を呈すると想定される。確認されたのは、198cm×

104cmの範囲である。

床面は平坦で、確認面からの深さは5cmと浅い。床面には周溝とピット2基が存在する。周溝は幅13~25cm、深さ6cmを測る。ピットは、直径22cmと30cm、深さは18cmである。

遺物は、出土しなかった。



第48図 3・4号住居跡出土遺物実測図

3、4号住居跡出土遺物観察表

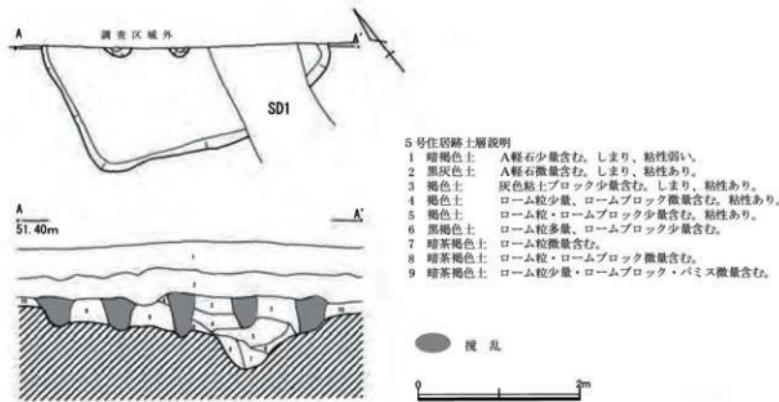
番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	环	(11.9)	(2.6)	-	赤褐色	普通	石英、角閃石、白色粒	図示10%	3、4住一括
2	皿	(17.2)	(2.2)	-	明褐色	普通	石英、角閃石、パミス、砂粒	図示7%	3、4住一括、磨滅あり
3	小形甕	(17.0)	(3.6)	-	淡褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示7%	3、4住一括
4	小形甕	(16.7)	(2.5)	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、砂粒	図示10%	3住図示
5	須恵環	-	-	-	灰褐色	不良	石英、長石、角閃石、片岩	破片	3、4住一括、末野
6	須恵長頸瓶	-	-	-	明灰色	良好	石英、長石、黒色粒	図示10%	3住図示、末野
7	須恵甕	-	-	-	暗褐色	良好	石英、長石	破片	3、4住一括、外曲平行叩き、内曲青海波叩き、末野
8	須恵甕	-	-	-	暗灰色	良好	長石	破片	3、4住一括、外曲平行叩き、内曲青海波叩き、末野

【1号溝】

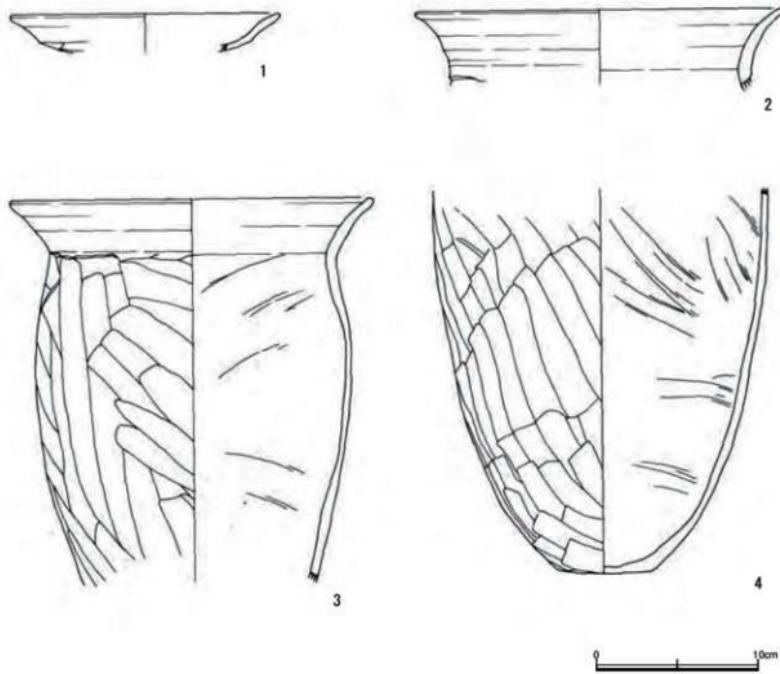
調査区のほぼ中央を東西に走行する。5号住居跡と重複し、切り合い関係から本遺構の方が新しいことが判明している。

溝の両端が調査区域外にあるため、全容は不明である。確認できたのは、長さ7.1mの範囲である。幅は最大で110cmを測り、確認面からの深さは61cmである。壁は角度をもち掘り込まれ、断面形態はV字状を示す。主軸方位は、N-6°-Eを示す。

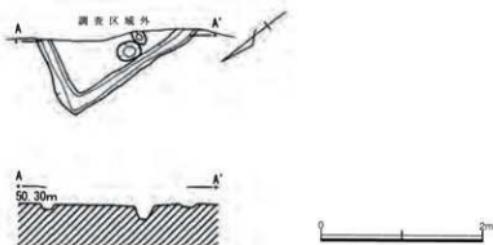
遺物は、多様である。土師器では、1・3の环、2の皿、9の高台塊、11の甕がある。須恵器では、18の高盤、19～24の甕、灰釉では8の小皿、10の鉢、12の長頸瓶、鉄軸小皿などがある。このほかに、13～15の土鍋、16の培焰、17の擂鉢がある。25は軒丸瓦、26は軒平瓦、27・28は平瓦である。小鍛冶関連の遺物もあり、29は羽口、30・37～39は鉄滓、32～36は椭形滓、40・41は炉壁、43は砥石である。



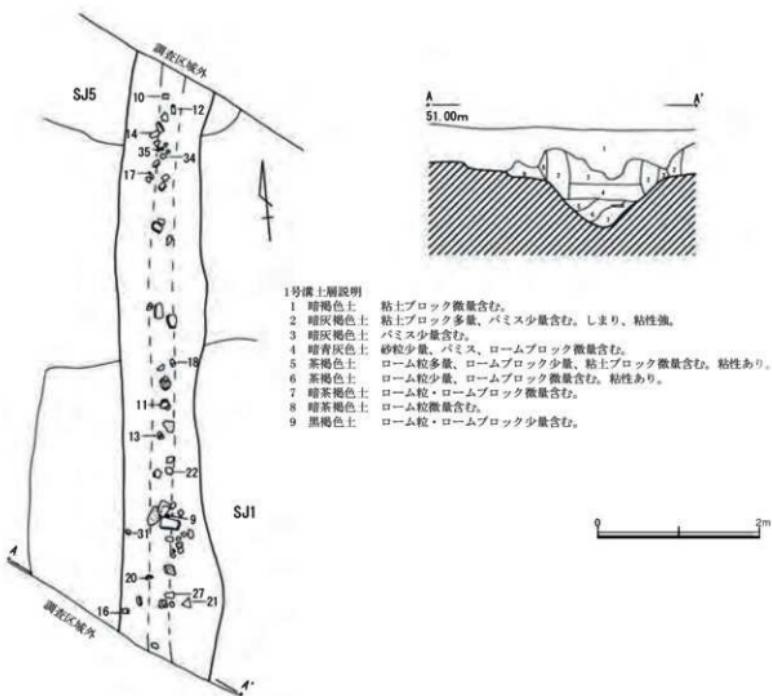
第49図 5号居住跡実測図



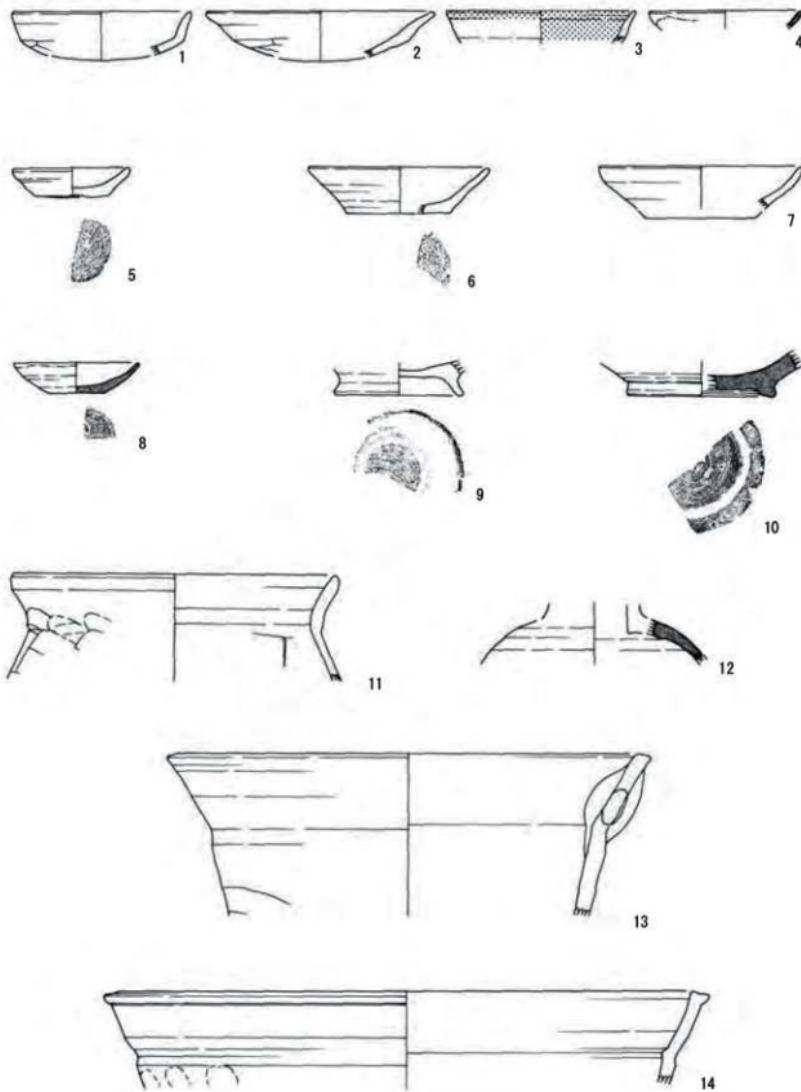
第50図 5号居住跡出土遺物実測図



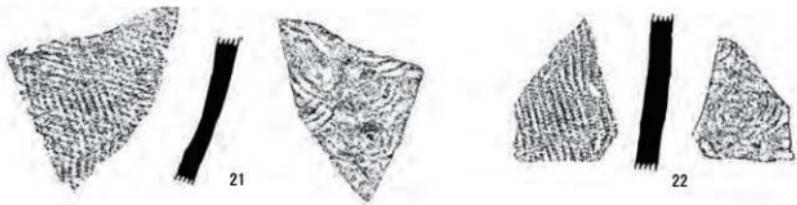
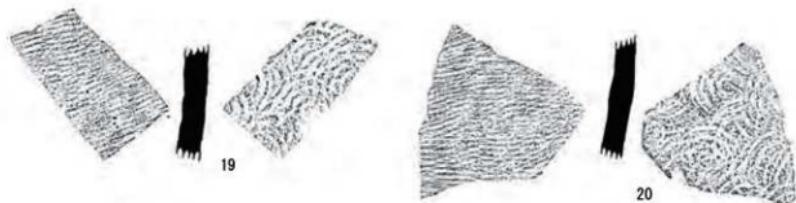
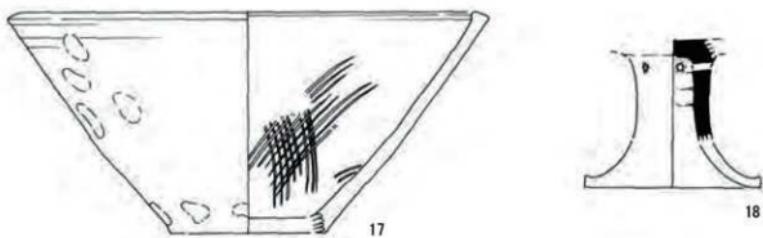
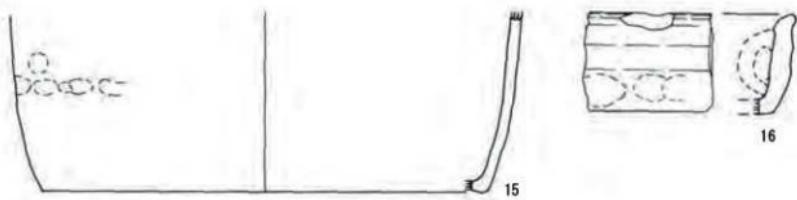
第51図 6号住居跡実測図



第52図 1号溝実測図

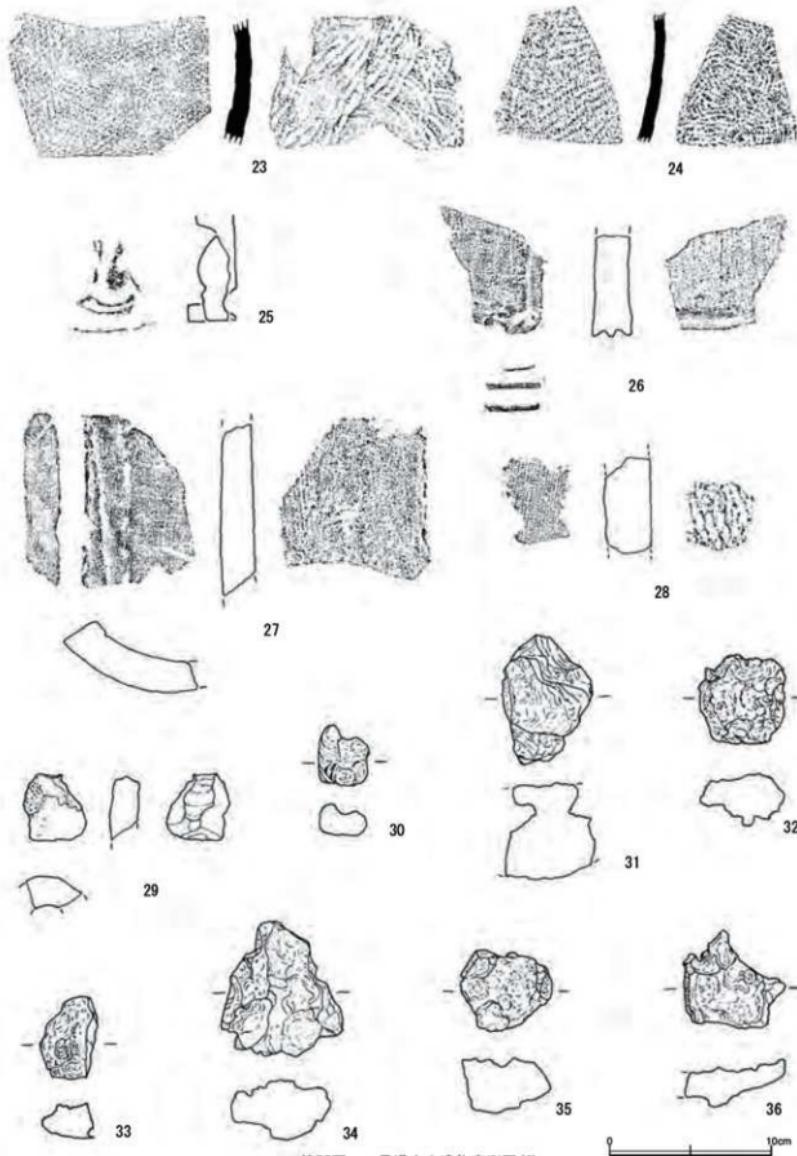


第53図 1号溝出土遺物実測図(1)

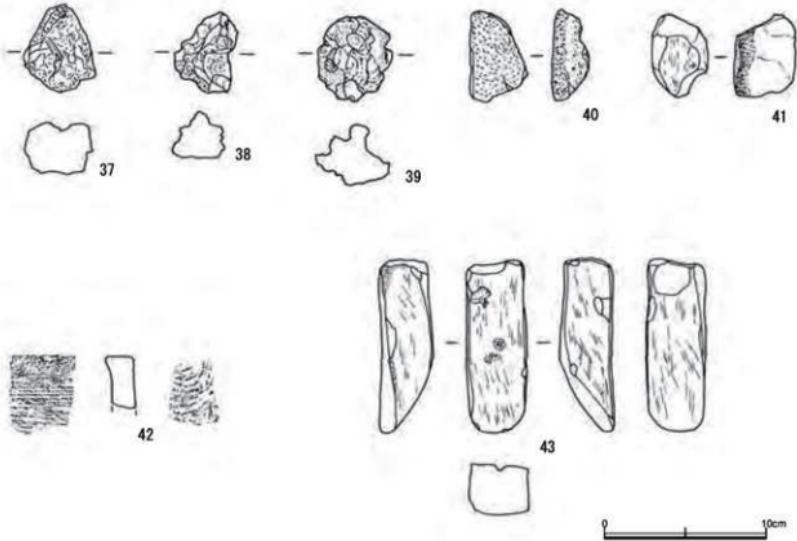


0 10cm

第54図 1号溝出土遺物実測図(2)



第55図 1号溝出土遺物実測図(3)



第56図 1号溝出土遺物実測図(4)

第1号溝跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	口径(cm)	最高(cm)	底径(cm)	色調	構成	胎土	残存率	備考
1	环	(16.7)	(3.0)	-	明褐色	普通	石英、角閃石	図示15%	覆土、漆成あり
2	皿	(13.7)	(3.1)	-	灰褐色	普通	石英、角閃石	図示20%	覆土、内外面に油脂状黒斑
3	环	(12.3)	(2.0)	-	暗赤褐色	良好	石英、長石、チャート、海綿骨針	図示7%	覆土、外表面赤茶、比企型
4	鉄袖小皿	(8.2)	(1.2)	-	灰茶色	良好	白色粒、(精良)	図示10%	覆土、美濃系
5	かわらけ	(7.0)	1.8	(4.4)	灰褐色	普通	石英、雲母、角閃石	43%	覆土、底部回転糸切り未調整板状柱あり
6	かわらけ	(10.8)	2.9	(6.3)	にじむ褐色	普通	石英、長石、角閃石、片岩、微砂粒	図示20%	覆土、底部回転糸切り未調整
7	かわらけ	(12.2)	(2.7)	-	にじむ灰褐色	普通	石英、雲母、(精良)	図示13%	覆土
8	灰褐色小皿	(7.5)	1.9	(3.2)	淡灰色	良好	黑色粒	25%	覆土、底部回転糸切り未調整板状柱あり
9	高台壇	-	(2.1)	(7.5)	灰褐色	普通	石英、角閃石	図示45%	図示、内面黒色処理、ロクロ士師器
10	灰褐色鉢	-	(2.9)	(8.8)	乳白色	良好	精良	図示35%	図示、美濃系
11	甕	(10.6)	(6.5)	-	棕褐色	普通	石英、雲母	図示15%	図示
12	灰褐色長瓶瓶	-	-	-	淡緑色	良好	長石、白色粒	図示25%	図示、東海産
13	土鍋	(29.1)	(10.0)	-	灰黒色	普通	長石、雲母	図示15%	図示、在地産、瓦質
14	土鍋	(34.8)	(5.9)	-	灰黒褐色	普通	長石、雲母	図示10%	図示、在地産、瓦質
15	土鍋	-	(11.2)	(27.0)	灰黒色	普通	石英、雲母、砂粒	図示15%	覆土、在地産、瓦質
16	焰塔	-	-	-	黒褐色	やや悪	石英、角閃石、長石、赤色粒	破片	図示、在地産、瓦質
17	縁鉢	(27.0)	13.6	(9.6)	明灰色	普通	石英、長石、角閃石、微砂粒	図示15%	図示、在地産、瓦質、縁り目8条
18	須恵高盤	-	-	-	淡褐色	普通	石英、長石、黑色粒	破片	図示、脚上部に4ヶ所の穿孔あり、末野
19	須恵甕	-	-	-	灰色	良好	石英、長石	破片	覆土、外表面平行叩き、内面青釉叩き、末野
20	須恵甕	-	-	-	灰色	良好	石英、長石	破片	図示、外表面平行叩き、内面青釉叩き、末野
21	須恵甕	-	-	-	明灰色	良好	石英、長石、黑色粒	破片	図示、外表面平行叩き、内面青釉叩き、末野
22	須恵甕	-	-	-	明灰色	良好	石英、長石	破片	図示、外表面平行叩き、内面青釉叩き、末野
23	須恵甕	-	-	-	明灰色	普通	石英、長石、黑色粒	破片	図示、外表面平行叩き、内面青釉叩き、末野
24	須恵甕	-	-	-	灰茶褐色	良好	石英、長石	破片	覆土、外表面平行叩き、内面青釉叩き、末野

第1号溝跡出土遺物観察表(2)

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
25	軒丸瓦	-	-	-	暗赤褐色	普通	石英、長石	破片	覆土、直立線、複合八葉、末野
26	軒平瓦	-	-	-	暗灰赤褐色	良好	石英、長石	破片	覆土、凸面ナデ、凹面布目、型抜き三連弧、末野
27	平瓦	-	-	-	淡灰色	普通	石英、長石、やや軟質	破片	図示、凸面綺ナデ、凹面布目、弱い横脊、唐誠、末野
28	平瓦	-	-	-	暗褐色	やや悪	石英、長石、片岩、細繩	破片	覆土、凸面綺、凹面布目、末野
29	引口	長さ4.1cm	幅3.9cm	厚さ1.8cm	重さ27.4g	磁着度中	石英、長石、細繩	破片	覆土、先端部に鉄分帯着
30	鉄津	長さ3.7cm	幅3.1cm	厚さ1.9cm	重さ24.2g	磁着度中			覆土、茶褐色で全体に錆び、亀裂あり 図示、上面成動状、下面縮締化、重量感あり
31	楕円津	長径7.9cm	短径5.6cm	厚さ5.9cm	重さ264.0g	磁着度弱			覆土、表面縮締状
32	楕円津	長径5.5cm	短径3.2cm	厚さ3.2cm	重さ90.9g	磁着度弱			覆土、表面縮締状
33	楕円津	長径5.0cm	短径3.5cm	厚さ2.2cm	重さ48.1g	磁着度弱			覆土
34	楕円津	長径8.3cm	短径7.5cm	厚さ3.7cm	重さ173.7g	磁着度弱			図示、表面発泡、下面縮締状
35	楕円津	長径5.6cm	短径5.0cm	厚さ3.4cm	重さ101.9g	磁着度中			図示
36	楕円津	長径6.2cm	短径6.0cm	厚さ2.4cm	重さ66.9g	磁着度弱			覆土
37	鉄津	長さ5.4cm	幅4.4cm	厚さ3.2cm	重さ30.3g	磁着度弱			覆土、全体的に発泡、軽い
38	鉄津	長さ5.0cm	幅3.5cm	厚さ2.9cm	重さ40.9g	磁着度弱			覆土、全体的に発泡
39	鉄津	長さ5.3cm	幅4.6cm	厚さ3.8cm	重さ55.5g	磁着度弱			覆土、全体的に発泡
40	かづ	長さ5.6cm	幅3.5cm	厚さ2.5cm	重さ24.7g	磁着度中	ササ	破片	覆土、表面発泡し還元化、鉄分帯着
41	かづ	長さ5.1cm	幅3.4cm	厚さ3.8cm	重さ49.0g	磁着度弱	石英、長石、ササ	破片	覆土、表面発泡し還元化、鉄分帯着
42	不明	-	-	-	明橙色	普通	石英、角閃石、チャート、微砂粒	破片	覆土、外側ハケヌ、青面波引き
43	帆石	長さ10.7cm	幅3.7cm	厚さ3.2cm	重さ178.2g	石質	帆石		覆土、中央部に円形の凹みあり

IV 発掘調査のまとめ

熊野遺跡は、榛澤郡家正倉跡と推定される中宿遺跡の南方約250mに位置する。今までに167地点において発掘調査が実施されてきた。131次調査における1号・2号住居跡から出土した畿内産土師器の年代観から、遺跡の成立は7世紀第3四半期と考えられる。さらに、1次調査で検出された7間×3間の掘立柱建物跡をはじめとする大規模建物群等の存在から、初期評家の性格が与えられている。

この131次調査区の南東約80mには、瑪瑙原石を出土した連結住居が存在する。更に、その50m先には、7世紀後半～末葉の土器を多量に出土した47次調査2号住居跡がある。土器の量・器種とともに豊富で、盤・脚付盤・円面鏡が多いことから、饗宴や行政実務が行われた可能性が指摘されている。

102次調査は、この2地点の中間に位置する。131次調査でも検出された掘立柱建物跡と大溝の肩が検出された。掘立柱建物跡は、2間×2間の側柱建物であり、131調査時に出土した土師器窓から7世紀後葉の時期と考えられる。大溝は幅3.5～4.3m、深さ0.75mを測るが、周辺における調査例は多いにもかかわらず流路は判明していない。平安末期には埋没していた状況が確認されている。

122次調査は、この南西400mの地点において実施された。2号住居跡は、出土土器などから7世紀前半から中葉の時期が想定される。熊野遺跡内では未検出であった初期評家成立以前の住居跡であり、注目される。現在、調査地の東隣を細田堀川が北流するが、耕地整理以前には緩やかな谷筋を小川が蛇行しながら流れっていたという。比較的平坦な熊野遺跡内における唯一の谷筋であり、この谷筋をはさんだ東西で遺跡の性格が異なる可能性も指摘される。

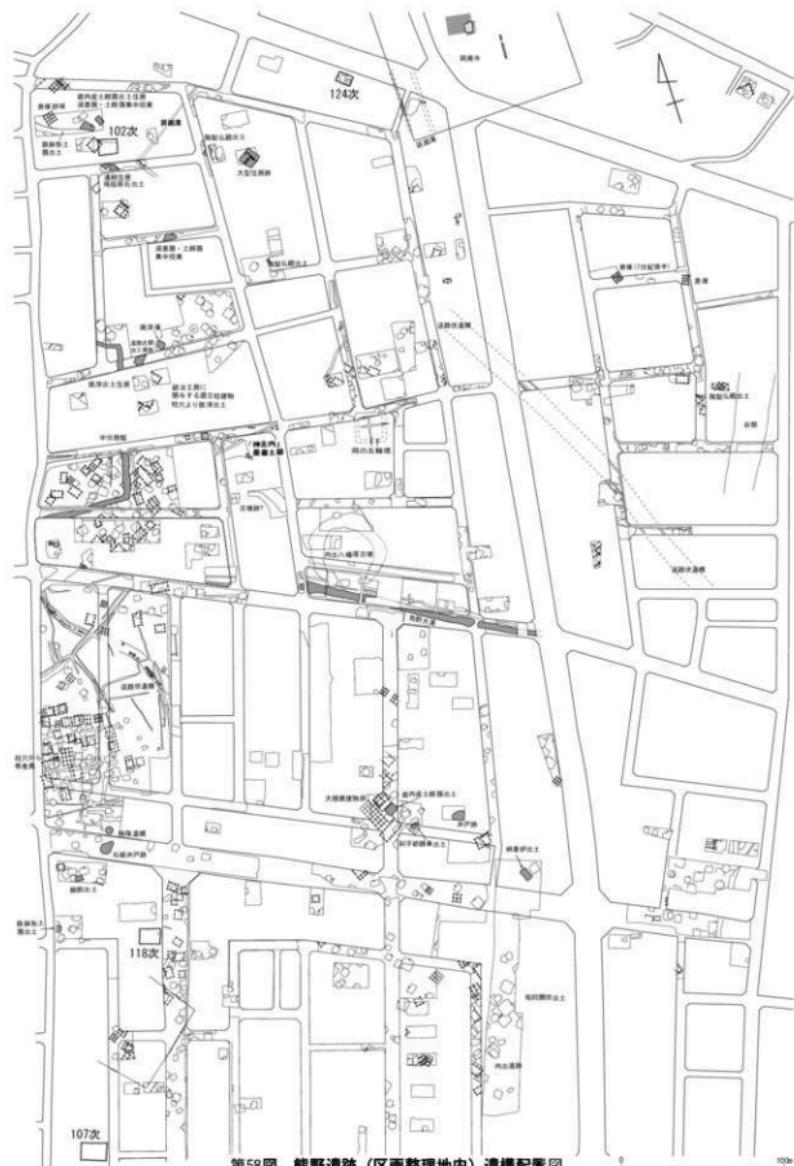
また、124次調査は、8世紀前半に建立されたと考えられる岡庵寺の南西に接する。岡庵寺の伽藍配置等は確認されていないが、掘込地業を伴う基壇建物であったことが判明している。今回の調査の結果、中世の溝からではあるが、軒平瓦や平瓦が出土しており、岡庵寺関連遺物として注目される。また須恵器高盤や灰釉の小皿・鉢・長頸瓶などの出土も特筆される。

118次調査では、世紀の井戸を検出したほかは、中近世の土坑を主体とした。

107次調査は、東西に走行する近世の溝跡を検出したのみであった。この溝は、230m以上に直線的に延びることが、周辺の調査結果から判明している。



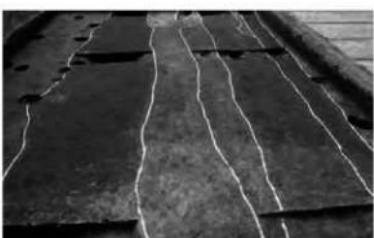
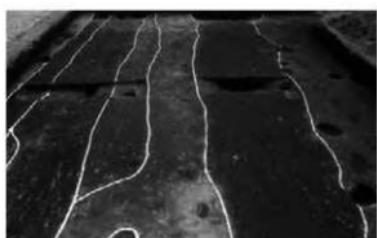
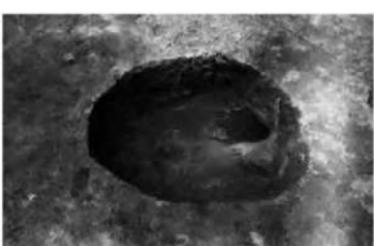
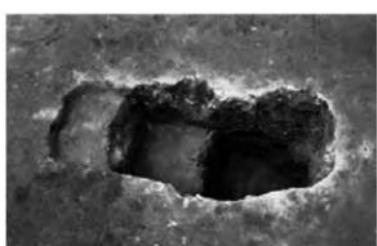
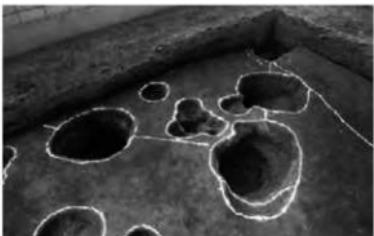
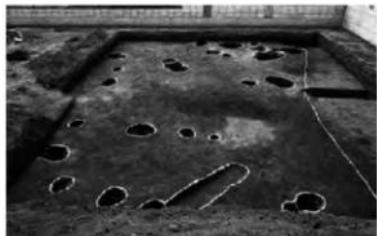
第57図 熊野遺跡全体造構配置図



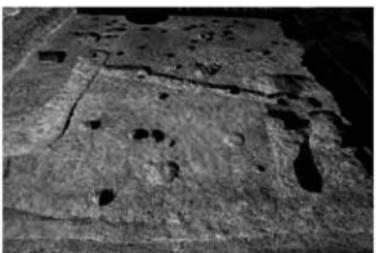
第58図 熊野遺跡（区画整理地内）遺構配置図

写 真 図 版

図版 1



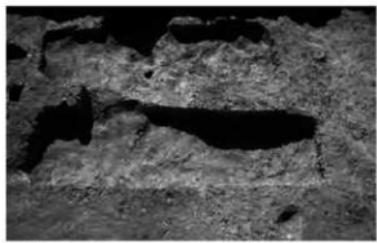
図版2



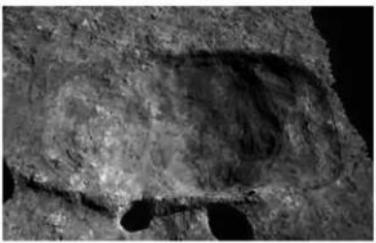
1号井戸跡



1号土坑



2号・3号土坑



4号土坑



熊野遺跡122次全景（西方より）



全景（東方より）

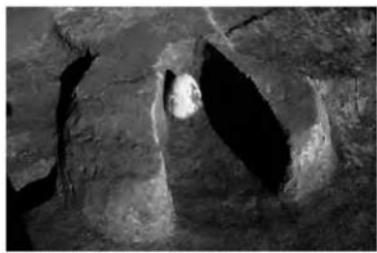
図版3



1号住居跡



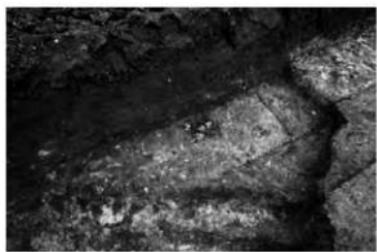
1号住居跡力マド遺物出土状況



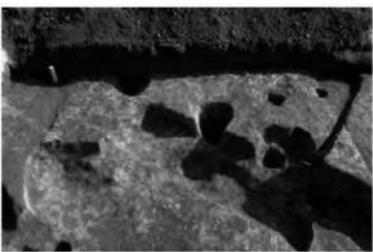
1号住居跡カマド支脚検出状況



1号住居跡力マド補強材検出状況



2号住居跡



3号住居跡

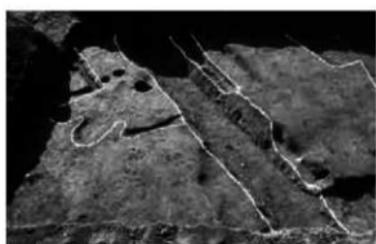
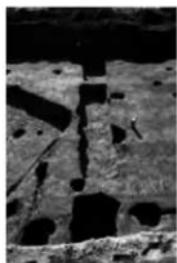


4号住居跡

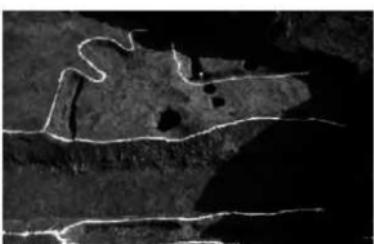


1号土坑

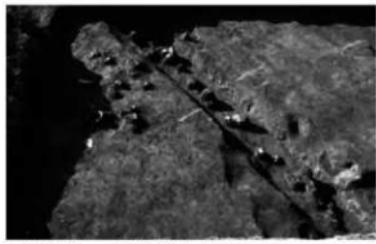
図版4



熊野遺跡124次全景



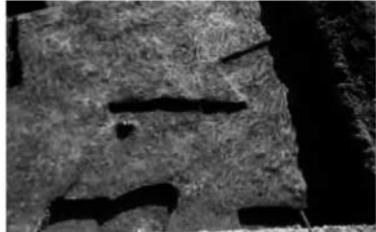
1号住居跡



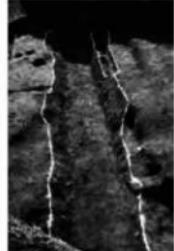
1号住居跡・1号溝遺物出土状況



1号住居跡遺物出土状況



2・3・4号住居跡

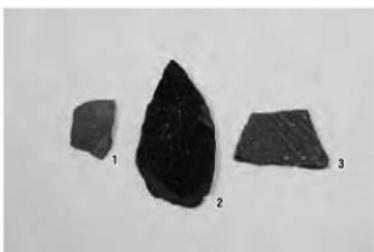


1号溝跡

図版5



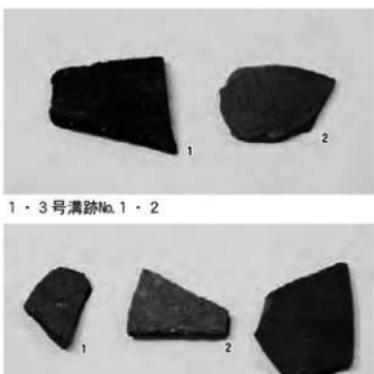
熊野遺跡107次 1号溝跡No. 1～6



3号溝跡No. 1～3



熊野遺跡118次 1号井戸跡No. 1～6



1・3号溝跡No. 1・2

1・4号土坑No. 1～3



熊野遺跡122次 1号住居跡No.10



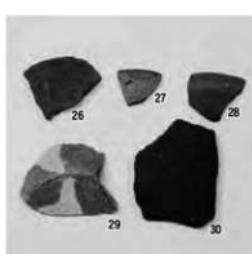
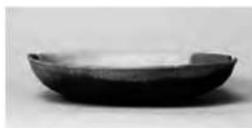
1号住居跡No.16



1号住居跡No.20

1号住居跡No.11

図版 6



熊野124次 1号住居跡No. 2

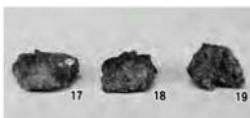
図版 7



熊野124次 1号住居跡No. 1



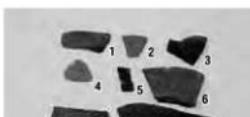
1号住居跡No. 16



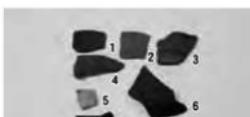
1号住居跡No. 17 ~ 19



1号住居跡No. 20



2号住居跡No. 1 ~ 8



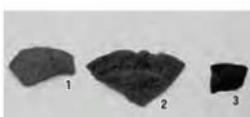
3・4号住居跡No. 1 ~ 8



5号住居跡No. 3



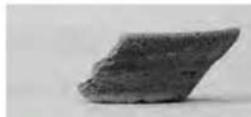
5号住居跡No. 4



1号溝跡No. 1 ~ 3



1号溝跡No. 5



1号溝跡No. 6



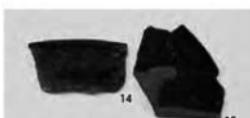
1号溝跡No. 8



1号溝跡No. 10



1号溝跡No. 13



1号溝跡No. 14・15



1号溝跡No. 16

図版8



1号溝No.17



1号溝No.18



1号溝No.19～24



1号溝No.26



1号溝No.25（表・裏）



1号溝No.27（表・裏）



1号溝No.28（表・裏）



1号溝No.29（表・裏）



1号溝No.30～39



1号溝No.43

報告書抄録

ふりがな	ふかやしないいせき							
書名	深谷市内遺跡 XVI							
副書名								
シリーズ	埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	第105集							
編著者名	宮本直樹、竹野谷俊夫							
編集機関	深谷市教育委員会							
所在地	〒366-0823 埼玉県深谷市本住町17-3番地 TEL 048-572-9581							
発行日	平成21年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
熊野遺跡 (102次調査)	埼玉県深谷市岡字前屋敷3047-5	11210	63-17	36° 12' 44"	139° 14' 26"	平成9年4月22日から 平成9年5月16日まで	397m ²	個人住宅
熊野遺跡 (107次調査)	埼玉県深谷市岡字熊野2939-2	11210	63-17	36° 12' 25"	139° 14' 19"	平成9年6月2日から 平成9年6月27日まで	500m ²	個人住宅
熊野遺跡 (118次調査)	埼玉県深谷市岡字熊野2912-4	11210	63-17	36° 12' 28"	139° 14' 22"	平成9年11月4日から 平成9年11月21日まで	247m ²	個人住宅
熊野遺跡 (122次調査)	埼玉県深谷市岡字千手堂1880-4	11210	63-17	36° 12' 38"	139° 14' 11"	平成9年12月8日から 平成9年12月20日まで	110m ²	個人住宅
熊野遺跡 (124次調査)	埼玉県深谷市岡字内出2785-2	11210	63-17	36° 12' 43"	139° 14' 34"	平成9年12月15日から 平成9年12月26日まで	70m ²	個人住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
熊野遺跡 (102次調査)	集落跡 官衙跡	奈良～ 平安時代	掘立柱建物跡 溝跡 土坑	なし				
熊野遺跡 (107次調査)	集落跡 官衙跡	近世	溝跡	土師器 須恵器				
熊野遺跡 (118次調査)	集落跡 官衙跡	奈良 近世	井戸跡 溝跡 土坑	土師器 須恵器				
熊野遺跡 (122次調査)	集落跡 官衙跡	飛鳥時代 奈良～ 平安時代	堅穴住居跡 土坑	土師器 須恵器				
熊野遺跡 (124次調査)	集落跡 官衙跡	奈良～ 平安時代 中世	堅穴住居跡 溝跡	土師器 須恵器 土鍋				

深谷市内遺跡X VI

2009年3月31日

編集発行 深谷市教育委員会
埼玉県深谷市本住町17番地3